

平成23年度

大阪大学

文学研究科・文学部 インターンシップ報告書

教育支援室

目次

はじめに……………	教育支援室インターンシップ専門委員	杉原 達 (文学研究科教授)	1
1 音楽関係			
1.0	音楽関係インターンシップ概要……………	文学研究科教授	伊東 信宏 2
1.1	インターンシップ生を受け入れて		
	… あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール支配人	藤村 治夫	3
1.2	ザ・フェニックスホール・インターンシップ報告		
	… 文学部3回生 音楽学専修	西東 壮一・渡邊 真央	5
1.3	京都コンサートホール・インターンシップ報告		
	… 文学部3回生 音楽学専修	秋山 良都・室 達人	12
2 演劇関係			
2.0	兵庫県立尼崎青少年創造劇場 (ピッコロ劇場) 制作演習		
	……………	文学研究科教授	永田 靖 18
2.1	ピッコロシアター・インターンシップ報告～地域に根差した演劇活動～		
	……………	文学部3回生 演劇学専修	小倉 有希 19
2.2	ピッコロシアター・インターンシップ報告		
	……………	文学部3回生 演劇学専修	新倉奈々子 28
2.3	ピッコロシアター・インターンシップ報告		
	……………	文学部3回生 演劇学専修	福本 伊歩 34
2.4	ピッコロシアター・インターンシップ報告		
	……………	文学部2回生 演劇学専修	立道 悠理 40
2.5	ピッコロシアター・インターンシップ報告		
	……………	文学部2回生 演劇学専修	馬場 絢子 46
2.6	ピッコロシアター・インターンシップ報告		
	……………	文学部2回生 演劇学専修	緑川 岳良 53
3 美術関係			
3.0	大阪市立美術館でのインターンシップ……………	文学研究科教授	藤岡 穰 61

はじめに

本報告書は、平成 23 年度に大阪大学大学院文学研究科および文学部において行われたインターンシップを含む授業について報告したものです。企業が募集し、学生が応募して参加するという形で行われるインターンシップは、近年、増加の一途をたどっていると思われます。本報告書は、授業とは別に開催されるこうした企業主導のものではなく、あくまで文学研究科・文学部の教員が働きかけて調整し、授業の一部として実施しているインターンシップの報告をとりまとめたものです。

以下に、その実習先、人数、期間を概観しておきます。

音楽関係

- | | | |
|--------------|---------|------|
| ○いずみホール | 学部生 2 人 | 5 日間 |
| ○ザ・フェニックスホール | 学部生 2 人 | 5 日間 |
| ○京都コンサートホール | 学部生 2 人 | 5 日間 |

演劇関係

- | | | |
|------------------------|---------|------|
| ○兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロ劇場） | 学部生 6 人 | 5 日間 |
|------------------------|---------|------|

美術関係

- | | | |
|----------|--------|------------------|
| ○大阪市立美術館 | 院生 1 人 | 年間 1～2 週間に 1 日程度 |
|----------|--------|------------------|

本報告書に記された活動を見ますと、本年度の実習先は音楽、演劇、美術という芸術関係の諸施設に、また指導教員や院生・学生も特定の専門分野・専修に限られています。しかしながら、参加者においては、かけがえのない経験を積んだことが各報告から十分に読み取ることができます。インターンシップの取り組みは、本研究科・学部の中期目標・中期計画に明記されてきた事項でもあり、今後とも着実に推進していく必要があると思われます。

最後に、大学側の希望を真摯に受けとめていただき、さまざまなお手数とご迷惑をおかけしているにもかかわらず、積極的に院生・学生たちを迎えて指導してくださっている受け入れ諸機関の皆様に、この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

教育支援室インターンシップ専門委員 杉原 達（文学研究科教授）

1 音楽関係

1.0 音楽関係インターンシップ概要

文学研究科教授 伊東 信宏

平成 23 年度の音楽に関係するインターンシップは、昨年に引き続きお願いしたいずみホール、ザ・フェニックスホールの協力を得たほか、新たに京都コンサートホールに受け入れを承諾していただき、計 6 名の学生について実施された。これは、1 学期、および 2 学期開講の「音楽学演習」受講生から希望者を募ったもので、6 名はいずれも文学部音楽学専修の 3 回生である。以下の学生からの報告は、受け入れ先のご意向を勘案し、ザ・フェニックスホール、および京都コンサートホールでのインターンシップについてのみ掲載する。

その内容については、以下の報告に詳しいので、ここではインターンシップ全体の経緯を時系列に即して書き留めておく。

- ◆ 4 月「音楽学演習」の開講に伴い、インターンシップの受講者を募集。今回は希望者が多かったため、新たに京都コンサートホールにも受け入れをお願いし、快諾していただいた。その後、研修先を決定した。
- ◆ 10 月 11 日（火） はずみホールの事前研修会を文学部にて開催。
- ◆ 10 月 12～18 日の中の 5 日間、はずみホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 11 月 1 日（火） ザ・フェニックスホールの事前研修会を文学部にて開催。
- ◆ 11 月 7～11 日の 5 日間、ザ・フェニックスホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 11 月 15 日～19 日の 5 日間、京都コンサートホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 12 月 13 日（火）、3 つのインターンシップについて、音楽学研究室の演習において、学生 6 名が報告。

昨年この欄に書いたように新しい受け入れ先の開拓は宿願だったが、今回京都コンサートホールに加わっていただき、大中小の 3 つの規模、公立や私立、と様々な性格のホールにご協力いただくことになったのは、大変ありがたいことだと思っている。

受け入れていただいたホールの方々には、今回も大変お世話になりました。研修期間中はもとより、事前研修で大学まで来ていただくこと、その後のケアまで含めて感謝しております。心からお礼を申し上げます。

1.1 インターンシップ生を受け入れて

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール支配人 藤村 治夫
(2012年3月末退任)

ザ・フェニックスホールは2011年度も大阪大学の学生様を、インターンシップ生としてお迎えしました。今回は、文学部音楽学専攻の渡辺真央さんと、西東壮一君のお2人。11月7日(月)から11日(金)の5日間、ホールにおいていただきました。

私たちが用意した研修内容は、コンサートホールの企画のあり方や広報の実情、また券売や貸し館業務など各種マネジメントの仕事の実情などを主に講義形式でお伝えしました、また公演パンフへのチラシの挟み込みなど簡単な作業も体験してもらいました。また、最終日11日には、私たちホールの主催公演「チェコの弦 パヴェル・ハース・クアルテット」の弦楽四重奏公演がございましたので、ゲネプロから開場・開演、終演、お客様やアーティストの送り出しまで、本番の日のスタッフの一連の動きを見ていただきました。

音楽ホールの業務は多岐にわたっており、集中的な講義方式でその全容をお伝えするのは難しいものがございますが、ふだん、音楽学を学ばれているお2人には、大学で学問として取り組んでおられる音楽が、社会の現場ではどのように扱われているかを少しは知っていただく機会となったのではないかと考えています。

日本経済の長期的な退潮傾向の中で、私たちが主に扱っている西洋芸術音楽(いわゆるクラシック音楽)を取り巻く環境は、年々厳しさを増しています。とりわけ大阪では、行政部門で芸術文化予算を大幅に削減する動きが出ており、「社会の中のクラシック音楽」をいかに位置付けてゆくべきか、私たち民間の事業者としても大きな課題を突きつけられています。研修では、こうした事柄についても、お2人に申し上げた次第でありました。

今回は、これまでにない研修メニューとして、在関西の音楽関係者でつくる研修・親睦組織「関西クラシック音楽ネットワーク」の例会にも参加いただきました。独立行政法人 国立病院機構「京都医療センター」に所属する音楽療法士・飯塚三枝子さん、飯塚さんの活動を医療に生かしておられる神経内科長の中村道三医師の発表を聴いていただきました。認知症患者の方などに対し、こうした医療機関で行われている音楽療法の状況を知ってもらうことで、「芸術」として以外にも、音楽が果たせる役割、あるいは機能があり得ることを、感じ取っていただけたと思います。

こうした問題意識は今後、社会の中で音楽に携わっていく上で私たち自身にも強く求められ

ていることであり、研究を続けてまいりたいと考えております。若い学生諸君に、ホールの業務を話すことは、自分たちの日常を外からの視線で見直すことに繋がっており、業務の改善、広い意味での社会化に道を開くものであります。その意味でインターンシップの受け入れは、私たちにとって貴重な機会であり、今後も大阪大学の方々と連携を強め、取り組んでまいりたいと願っております。

引き続き、宜しく御願いたします。

1.2 ザ・フェニックスホール・インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部3回生 音楽学専修 西東 壮一・渡邊 真央

<目次>

- 0. はじめに
- 1. ホールについて
- 2. 研修内容概略
- 3. 研修内容報告と感想
 - 3.1 一日目
 - 3.2 二日目
 - 3.3 三日目
 - 3.4 四日目
 - 3.5 五日目
- 4. 感想

0. はじめに

私達は、平成23年11月7日（月）から11日（金）の5日間、大阪市内にあるコンサートホール「ザ・フェニックスホール」において、インターンシップに参加した。その研修内容は、ホール運営の実態、メセナ活動としての音楽供給事情など、私たちが普段意識しないことが体験できる、非常に新鮮で有意義なものであった。今回はその体験を報告したいと思う。

1. ホールについて

ザ・フェニックスホール（THE PHOENIX HALL）

1995年、旧同和火災海上保険株式会社の創立50周年にあたり、現在の親会社、あいおいニッセイ同和損害保険会社によって開設された。ホールのコンセプトは、あいおいニッセイ同和損害の企業メセナの拠点として芸術、文化を長期的に支援していくこととしている。

- ・所在 大阪市北区西天満4丁目15番地10号室
あいおいニッセイ同和損害フェニックスタワー内
- ・客席数 標準 301席（最大335席）
ホール1階席：標準168席（可動・最大202席）、
ホール2階席：133席（固定）
- ・用途 主としてクラシック音楽のリサイタル・室内楽コンサート
- ・構造 乾式浮き構造
- ・天井高 13m

2. 研修内容概略

期間 平成23年11月7日(月)～11日(金)

第一日目 11月7日(月) 午前9時～12時

- ① ホール職員紹介・全体朝礼 (10分)
- ② ホール施設案内 (60分)
- ③ ザ・フェニックスホールの概要 (80分)

第二日目 11月8日(火) 午前9時～午後6時

- ① 自主企画事業 (150分)
- ② 著作権について (60分)
- ③ ザ・フェニックスホール友の会組織・運営について (30分)
- ④ ザ・フェニックスホールチケットセンター (110分)
- ⑤ 貸館公演の受付・インフォメーションの作成 (50分)

第三日目 11月9日(水) 午前9時～午後6時

- ① ホームページ運営 (40分)
- ② サロン封入 (270分)
- ③ 機関誌「サロン」について (80分)
- ④ 貸館事業 (110分)

第四日目 11月10日(木) 午前9時～午後6時

- ① 自主企画公演・広報 (100分)
- ② 「パヴェル・ハースクアルテット」の公演概要 (40分)
- ③ 全体会議(打合せ)参加 (20分)
- ④ チラシ挟み込み (40分)
- ⑤ 社外セミナーへ参加(中央電気倶楽部)
テーマ 「今注目されている、音楽療法を探る」 (90分)
- ⑥ 全般質疑応答 (60分)

第五日目 11月11日(金) 午前9時～午後6時

「公演当日の対応について」を研修テーマとして

ホール内準備、リハーサル立会い、公演本番対応等

3. 研修内容報告と感想

2.1 一日目

- ・ホール施設案内 / ザ・フェニックスホールの概要

ホール施設を見学した。音響室や写真撮影用の部屋など、普段コンサートに行く時には入れないような施設も見ることができた。印象としてはとても小ぢんまりとしたホールであった。遮光壁を上げると梅田の町並みを見下ろせる立地となり、それがホールとしての一つの魅力となっていることを感じた。実際のコンサートでは、アンコールの際に、遮光壁を上げることが多いようだ。

2.2 二日目

- ・自主企画事業

アートマネジメントの観点から、コンサートホールにおいて、自主企画公演をするというのはどういうことなのか、どのような立場から自主企画公演をしていかなければいけないのか、これからどのような自主企画公演がありうるのか、といった内容の講義であった。その中で、もっともよく取り上げられた言葉の一つとして、メセナが上げられる。利益を追求しない自主企画公演においては、よりメセナが意識されているのだと感じた。またそのメセナ活動はどうあるべきだという、決まった答えはなく、会社、コンサートホールの中で、時代や社会状況に応じて、その方向性を模索し続けながら活動をしていかなければならないという、難しい現状も知った。

- ・著作権

コンサートホールを運営する際に著作権がかかわってくるということは、なんとなく予測できていたが、想像以上に大変な仕事だということを感じた。コンサートにおいてその曲が何分何秒使われたのか、編曲はされているかなど、細かいところまで記録し、コンサートの度に、JASRAC に申請しなければならない。

- ・ザ・フェニックスホール友の会組織・運営について

ザ・フェニックスホールが、入場数を増やすために行っている事業の一つとして、「友の会」が挙げられる。「友の会」は年会費 1000 円で、チケットの先行予約や、チケット割引、情報誌「salon」の送付、提携店における割引など、さまざまな特典をうけられる会員サービスである。会員数を増やすために、パンフレットを切ってそのまま申込書にできるようにするなど、ここにおいても細かい配慮が見受けられた。

- ・ザ・フェニックスホールチケットセンター

実際にロールプレイングをしながら、チケットの受付を擬似的に体験してみた。お客様の求める席をうまく聞き出し、今あいている席の中で、もっともそれに適した席を瞬

時に理解したうえで、その席がどのような席なのかというのを、電話越しでうまく説明しなければならない。非常に難しかった。しかしチケットを買うという行為はそのコンサートに行く、最初の一步であることを考えると、とても大切に重要な仕事であることを感じた。

- ・貸館公演の受付・インフォメーションの作成

貸館公演を受付する際に行う実際の手続きについて、説明を受けた。ホールを借りるためにはさまざまな条件、細かい審査があり、細部にまで気を配らなければならないホール管理事業を垣間見た。また、ホールのステータスを維持するために、個人の発表会などについてはホールを貸さないようにしているという話は印象的であった。

2.3 三日目

- ・ホームページ運営

私たちが情報を得る際にしばしば、ホームページを利用することからもわかるがホームページは、宣伝活動として、非常に重要な役割を果たしている。ザ・フェニックスホールも、そのような観点からホームページを運営し管理しているようだった。何人が何分間、ホームページを見たのか、どのような検索ワードからホームページにたどり着いたのか、といった情報をネット上で、記録管理しているのは驚きだった。

- ・サロン封入

サロンとは、先述した「友の会」の会員に送付される情報誌であり、それを封入する作業をお手伝いした。職員のほとんどがひとつの部屋に集まり、地道な手作業を延々と続けるもので、少し慌しい空気も感じられた。コンサートホールの仕事にはいろいろな事務作業がたくさんあることを実感した。

- ・機関誌「サロン」について

サロンとは、先述した「友の会」の会員に送付される情報誌である。デザイン会社と、何度も打ち合わせ、修正を行いながらひとつの情報誌を作り上げる作業は非常に大変だと感じた。「友の会」の会員の中には、サロンが楽しみで「友の会」に入会している、という話も聞き、サロンが、ザ・フェニックスホールとお客さまをつなぐものとして、とても重要な役割を果たしているのだと感じた。

- ・貸館事業

貸館事業の意義、必要性などについての講義を聞いた。その中で、話されていたのは、①ホールのイメージ作りをすること、②自主企画公演をあわせた全体コストのバランスを保っていくこと、であった。一見、貸館を担当するホール管理グループと自主

企画公演グループで、事業が分かれているように見えるが、やはり二つのグループが協力してホールを運営していかなければいけないのだと感じた。

2.4 四日目

・自主企画公演・広報

広報についての講義を聞いた。若者を中心にコンサート離れが進行している中で、いかにコンサートを宣伝し、入場者数を伸ばしていくか、という非常に重要な話題であった。新聞社に対する働きかけが、もっとも印象的であった。A4の紙一枚に、わかりやすく、そして興味をそそるような内容をのせた、公演資料を新聞社に送り、それを記事にしてもらえるように働きかける。その後新聞社の記者に直接会ったときには、さりげなくその公演のことを口にする、といったこともされるようだ。まさに、地道な努力というものである。また、新たな広報活動も視野に入れようという話も聞いた。最近流行しているツイッターなどは今では大きな宣伝媒体となっている。コンサートホールにおける広報活動には、まだまだ可能性があるように思った。

・「パヴェル・ハースクアルテット」の公演概要 / 全体会議（打合せ）参加

五日目に実際に立ち会う「パヴェル・ハース・クアルテット」の公演についての説明があった。この公演は、ティータイムコンサートという金曜の昼からあるコンサートで、途中休憩でお菓子やドリンクが飲めるというコンサートということであった。お客様は「友の会」の会員が多く、年間6回の通し券を買われて、アーティストの好き嫌いにかかわらず、毎回こられる、という方も多そう。そこには私たちが今まで経験してきたコンサート鑑賞とは違うスタイルのコンサート鑑賞があり、興味深かった。またその後、実際の公演に対する打ち合わせを見学した。当日券の扱い方など、全体の意識統一がなされ、職員全員がひとつとなって公演を作り上げていくという様子が伺えた。

・社外セミナーへ参加（中央電気倶楽部） テーマ「今注目されている、音楽療法を探る」

社外セミナーに参加し、京都医療センターの医師と音楽療法士から、音楽療法について学んだ。マンツーマンの音楽療法を通じた認知症の治療や末期ガンの患者を対象とするターミナルケアなどの事例紹介では、音楽を楽しみ、歌うことで患者が自己の存在感を取り戻し、社会性の回復につながっている現状について聞き、音楽療法の可能性を感じた。患者主体のミニコンサート、病棟 BGM の選曲など音楽に関わる活動や環境づくりなどの事例についても聞くことができた。芸術としての音楽とは異なる新しい音楽の力を知る機会であった。アメリカにおいては、認知症患者に対する音楽療法が日本以上に取り入れられているという話を聞き、もっと日本においても認知症の治療の一つとして音楽療法が取り入れられるべきだと思った。しかし音楽療法士の技量で、治療効果が大きく作用されるらしく、音楽療法士の育成が大きな課題であると感じた。

・全般質疑応答

自主企画グループの皆さんにやりがいや就職活動について教えていただいた。ホールで働くにあたって、アーティストやお客様に感謝されたときやスケールの大きい事業を達成できたときなど、対人間の職業ゆえ、他人から評価されたときにやりがいを感じるそうだ。就職活動に関しては、自分が何をしたいのか、何を頑張ってきたのかということ、気負いせず自分らしく伝えることが大事であるということ、何事に対しても誠実であるような人間と一緒に働きたいといったような、多くのアドバイスをいただいた。

2.5 五日目

・「公演当日の対応について」を研修テーマとして

公演名：ティータイムコンサートシリーズ 85

チェコの弦 パヴェル・ハース・クアルテット

公演日：平成 23 年 11 月 11 日（金）

開場 13：30 開演 14：00 終演 16：00

出演者名：パヴェル・ハース・クアルテット

ベロニカ・ヤルツコヴァ（第一ヴァイオリン）

エヴァ・カロヴァ（第 2 ヴァイオリン）

パヴェル・ニクル（ヴィオラ）

ペテル・ヤルシェク（チェロ）

曲目：第 1 部 パベル・ハース 弦楽四重奏曲第 1 番 嬰ハ短調 作品 3

ドヴォルザーク 弦楽四重奏曲第 12 番へ長調「アメリカ」作品 96

第 2 部 スメタナ 弦楽四重奏曲第 1 番 ホ短調「わが生涯より」

他アンコール曲 3 曲

公演当日ということもあり、朝早くからスタッフの皆さんは、きっちりと決められた役割をもくもくとなしていた。インターン生の私たちは全体の導き、アーティストの迎え入れ、ゲネプロ見学、全体の打ち合わせに同席、お客様同線の確認、各部署の動きの概要説明、フロアマネージャー、ステマネなど、多くのことを経験・見学させていただき、またパヴェル・ハース・クアルテットの演奏をホール内で聴く機会も用意していただいた。弦楽四重奏団の「パヴェル・ハース・クアルテット」は、弦楽演奏で長く豊かな歴史を誇るチェコの気鋭アンサンブルで、「室内楽の殿堂」を目指しているザ・フェニックスホールでの演奏はまさにうってつけの舞台であるように思った。平日の 14 時から 16 時までの公演ということもあり、お客様の年齢層は高めであった。JASRAC に詳細を伝えなければならないので、一曲ごとの時間を計っており、著作権の大変さを痛感した。終演した後も、物品販売や面会、サイン会、アンケートの回収、お客様の見送りといった対お客様の仕事、アーティストの管理や送り出

しといった対アーティストの仕事など、多くの仕事があり、表から見ると非常に華やかな世界でも、裏では泥くさく仕事をしているのだと感じた。

4. 感想

今回のインターンシップを通じて、私は「社会」の中に音楽が存在している、という当たり前の事実が改めて気づかされました。普段の私にとっての音楽は、芸術、研究対象、趣味娯楽として、私個人の中に位置するものであるのに対し、ザ・フェニックスホールにおける音楽は、メセナ活動の一つとして、「社会」の中に位置するものでした。そのため今回のインターンシップで伺った、ホール職員の方々の音楽に対する姿勢は、自身のそれとは少し異なり、とても新鮮で興味深く、話を聞く中で、より多角的に音楽を見られるようになったのは、と感じています。

ホールの皆様には忙しい中、丁寧に様々なことを教えていただきとても感謝しております。5日間ありがとうございました。(西東)

音楽を仕事としている人といったときに、以前は演奏者ばかりを想像していたが、今回ザ・フェニックスホールのインターンを通じて、ホールという音楽を提供する場で働く人たちからお話を聞くことができ、一つのコンサートが目には見えない多くの人たちに支えられて完成しているのだとわかり、非常に感銘を受けました。お客様を喜ばせる音楽ってどんな音楽だろう、その音楽をどういう形で提供したらお客様に喜んでいただけるのだろう、また演奏者にとって快適な演奏空間とはどんな空間だろう、演奏者の良さをどうお客様に伝えたらよいのだろうなど、音楽そのものだけでなく音楽を取り巻く環境も学ぶことができ、5日間で視野が広がったように思います。ホールの皆さまのおかげで充実したインターンシップを経験できたことをとても感謝しています。ありがとうございました。(渡邊)

1.3 京都コンサートホール・インターンシップ報告

【学生からの報告】

文学部 3 回生 音楽学専修 秋山 良都・室 達人

【報告概要】

音楽学の学部生である秋山と室の二人は、音楽学研究室を通しての就労体験として 2011 年 11 月 15～19 日の 5 日間、北山にある京都コンサートホールで様々な取り組みを行った。

報告の概要は以下。

- 施設概要
- 自主事業
- チケット業務
- 舞台業務
- 演奏会当日業務
- 所感

【施設概要】

インターンシップ初日は主に施設案内を受けた。

- ・所在地：京都市左京区下賀茂半木町 1-26 地下鉄烏丸線北山駅下車すぐ
- ・主要用途：コンサートホール
- ・建築設計：磯崎新アトリエ^{※1}
- ・音響設計：永田音響設計^{※2}
- ・建設：1992 年 10 月～1995 年 3 月
- ・管理運営：公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団^{※3}

■コンサートホール（大ホール）

客席数 1839 席（うち車いす席 6 席）。シューボックス型。主としてオーケストラ演奏に使用される。舞台、客席共に均整のとれた美しい造り。

「演奏が始まるや、ホール全体が歌いだしたかのように響きだす。まさに五感を呼び覚ますホール」（京都コンサートホールパンフレットより）

■パイプオルガン

ドイツ、ヨハネス・クライス社製。90 ストップ、パイプ総数 7155 本。尺八、篠笛、笙、箏の和楽器ストップ搭載。風水の観点から、あえて舞台後方中央ではなく、舞台後方右寄りに設置してある。

■アンサンブルホール ムラタ（小ホール）

客席数 514 席（うち車いす席 4 席）。室内楽や独奏、小編成のオーケストラの演奏に使用される。独特の六角形の空間も風水の観点によるもの。

「心地よく音楽と対話するためにしつらえられた小宇宙」（同パンフレットより）

■ エントランス

ここも風水に基づいて設計されている。中央部には十二支をイメージした十二本の円柱を配置。京都コンサートホール独特の螺旋状スロープは、聴衆を現実世界から音楽的陶酔の世界へと誘う、という意味がある。（一方年輩の方からはスロープが長すぎて疲れる、というクレームもある。）

※1 磯崎新（いそざき あらた）

ポストモダン建築の第一人者。京都コンサートホールのほかに、ロサンゼルス現代美術館、水戸芸術館など、美術館や劇場の建築を多く手掛ける。

※2 永田音響設計

サントリーホール、東京芸術劇場、新国立劇場、兵庫県芸術文化センターなど、日本の主要な劇場、ホールの音響設計を手掛ける。

※3 指定管理者制度

民営化の一環。従来地方公共団体が管理していた施設を、民間の営利団体、財団法人、NPO などに委託し、管理を代行させる。2003 年 6 月の地方自治法改正で施行。公共ホールであっても、民間のホールとの競争が必要となり、一層の経営、企画努力が必要となった。

【京都コンサートホールにおける自主事業】

16 日は、事業課の福島さんによる京都コンサートホール及び京都市音楽芸術文化振興財団の活動のレクチャーを受け、その後ディスカッションを行った。

京都コンサートホールでは、民間の企画会社等などによる持ち込み型の事業（一般的なホールレンタル事業）と、財団として自主事業の主な二つによって通常的に運営を行っている。

今回は財団による自主事業について取り上げる。

自主公演に際し、財団としては事業の性格別で次の 3 つに分類している。

分類	主な公演
【鑑賞型】 海外オーケストラや著名アーティストによる公演など	パーヴォ・ヤルヴィ指揮パリ管弦楽団 モーツァルト・ツィクルス 他

<p>【普及型】 ・所謂、入門編に位置づけられるもの ・チケット代が廉価なもの</p>	<p>田隅靖子館長ア・ラ・カルト公演 京響メンバーによるブラスアンサンブルのタベ 他</p>
<p>【参加型】 市民が自ら参加し、創造活動を行う</p>	<p>京都市ジュニアオーケストラ 他</p>

「鑑賞型」に分類される公演が現在の自主事業の中心であるが、「音楽芸術文化」の振興活動としては「普及型」「参加型」も一定の割合が必要であり、この3種類の事業に関して集客／収支面でバランスをとっていく事は常に考えられるべき課題であろう。

■会員・優待制度等

京都コンサートホールとして現在行っている会員制度は2つ。

- ・京都コンサートホール **Club**（年会費 1000 円／毎年 4 月 1 日から翌年 3 月末まで 1 年間）
→チケットの優先予約や割引販売（グッズも含む）・DM の送付など
- ・スペシャルメンバーズ（複数公演のセット販売／新年度に募集開始）
→主に著名な海外オーケストラ公演を組み合わせると高い割引と特典を付加し、一般発売前に申し込みを募ることで固定客を獲得するのが狙い。

特にスペシャルメンバーズ（以下 SPM）は上記の「鑑賞型」事業の中核として考えられており、「クラシック音楽の殿堂としての京都コンサートホール」を内外にアピールする企画として

いる。
また京都市交響楽団の「京響友の会」も、実質的には京都コンサートホールでの会員制度の一つと言って差し支えない連動性を有している。

■ホールレンタルに際し、京都の大学・高校のクラブやサークル活動、または京都に縁のある音楽家などに一定の条件下で助成金を交付する制度も創設した。

他にも、(株)エフエム京都との共催事業として認可する事で平日の利用料金を割り引く「ウィークデーパッケージプラン」などの充実により、クラシックだけにとどまらずジャンルや催し内容の間口を広げている。

【チケット業務】

17 日はチケット業務全体の把握、そして業務の問題点や改善点を纏める事が主な活動となった。

京都コンサートホールで行われる公演のチケットを購入する際、経路は大きく分けて3つ。

- 窓口での直接購入（座席指定が可能）
- 電話での予約（郵送や当日受け取りなどが選択できる）
- インターネット予約（24時間受付・コンビニ決済などにも対応・座席指定不可）

業務見学、及び体験した上での所感は以下。

- ・業務の殆どが手作業によるものである（会計のシステムの流れの悪さ）
- ・チケット販売及び管理と、顧客管理が一貫していない（置き換えが容易で無い）
- ・窓口及び電話販売における申込書の記入管理や、購買者が記入するという問題
- ・顧客管理システムそのものの問題（管理の全てがアナログ→購入履歴や嗜好の整理などが現状追いついていない）
- ・席指定の問題（各販売方法における、席の割り当ての不均衡及び窓口での座席管理）

チケットの購入システム、及び処理業務については、残念ながら他の民間ホールに比べて非効率な部分が多い。

コスト削減の為には（主にソフトウェア面での）業務システムの早急な改善が望まれる。

【舞台業務】

18日、洛南高校吹奏楽部定期演奏会のリハーサル（大ホール）、みやこ風韻（小ホール）の仕込みおよびリハーサルの見学をさせていただいた。

京都コンサートホールでは、舞台業務を株式会社 SMS に委託している。SMS の森本さんに「ステージマネージャー」の仕事についてお話を伺った。

■利用者の目線で考える

ホールを利用するのは一流のプロから、アマチュア、学生、と多岐にわたる。常にそれぞれの目線に合わせて考え、上からの目線になってはいけない。

■音楽的な知識も必要

演奏家や利用者の、細部にわたる要望、楽曲や楽器についての知識、さらには演奏に関する知識が必要。演奏家や利用者から要望を言ってもらいよりも前に、あらかじめベストな状態を提供、提案するという姿勢。

■まだまだ認知度が低い、音楽ホールのステージマネージャー

音楽ホール専属のステージマネージャーは、現在日本で20名程度。円滑なコンサートの進行や、より快適なコンサートホールの利用にはステージマネージャーの存在が欠かせない。ステ

ージマネージャーの存在がもっと世の中に認知され、普及していくべきである。

表に出ない仕事ながら、演奏会にはなくてはならない存在であるステージマネージャー。単なる知識だけでなく、経験に根ざした観察力と行動力、細部にわたる気遣いが必要な仕事である。

【演奏会当日業務（レセプション、グッズ販売）】

19日の京都市交響楽団第552回定期演奏会の演奏会当日業務を体験。

■チラシ挟み込み

演奏会のパンフレットに同コンサートホールや、財団主催の演奏会のチラシを挟み込む。挟み込むチラシは順番が決まっており、基本的には財団主催の演奏会→その他の演奏会の順番で、日付順に重ねて挟み込む。およそ1500枚のチラシを挟み込まなければならないので速さと正確さが求められる。ホール職員の方々は職人的な速さと質でチラシを挟み込んでいた。

■レセプション業務

大ホール入口にてチケットもぎり後、パンフレットをお客様に配布。次々来場されるお客さまに対して、臨機応変な対応と丁寧さが必要。（パンフレットを不要とするお客様もいらっしゃる。また、中のチラシは抜いて、パンフレットだけをお求めになるお客さまも。）パンフレットを配布すると同時に、大ホールへの誘導の声掛けや、当日は雨だったので傘の取り扱いの声掛けなども行った。

■グッズ販売

京都コンサートホールおよび京都市交響楽団はTシャツ、レターセット、シール、コインケースなど、多岐にわたるオリジナルグッズを販売している。演奏会の休憩時及び終演時には販売ブースに多くのお客様が列をなしてグッズを購入されていた。

販売方法は簡易的なもので、レジはなく、商品の販売個数や売上高はすべて手動で管理している。

演奏会は演奏そのものがお客様に届けられるものであるが、その演奏会を成り立たせるためには、演奏家のみならず、裏方、表方はじめ様々な人たちが携わっている。演奏だけが演奏会ではないということを実感した。

【所感】

■いつもは客の一人として京都市交響楽団の演奏会などを聴きに京都コンサートホールに赴いている。また、同コンサートホールでは演奏者として出演したこともある。今回はそんなコンサートホールを、文字通り「内側」から見た。普段何の気なしに演奏会に赴いているが、その演奏会開催には、演奏家だけでなく、企画から始まり、ステージマネージャー、レセプション、更にはその空間を提供するホールの設計者など、たくさんの人が関わっている。そして、

演奏会に関わるどの仕事の人もそれぞれ自分の仕事に強い使命感と誇りを持って働いている。演奏会は謂わば一つの壮大なプロジェクトである。いつも演奏者もしくは聴衆として音楽に関わっているし、それこそが音楽をすることだと思いがちであったが、音楽を提供する仕事は演奏だけではないということを学ぶことができた。就労体験、ということのみならず、音楽とのかかわり方について考えさせられた一週間であった。（秋山）

■恥ずかしながらクラシックについては素人同然の知識しかないが、公共事業として音楽施設がどう運営されているかの一例を現場で学ぶ事を、今回のインターンシップでは主な目的と考えていた。

民間のライブハウス等でイベントを企画した経験は多少あるが、それらと比べると京都コンサートホールでの公演事業は規模だけでなく性質も異なった部分が多く見られた。勿論、事業としてある程度の数字を出さなければならないのではあるが、その一方で「音楽文化の振興」という理念に基づき、赤字を覚悟して裾野を広げる必要もある。結果としての「数字」が重視される民間のコンサート事業とはまた違った観点でも活動していくというのは、深く考えさせられた点の一つであった。生活の中で音楽文化をどう活かしていくか、という問いは音楽学を学ぶものにとって誰しもが考えるべき問題であろう。インターンシップで出会った多くの人々の熱意を受け、改めて意識を強める事となった。（室）

2 演劇関係

2.0 兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロ劇場）制作演習

文学研究科教授 永田 靖

1 目的

「劇場制作演習」では、公立劇場での公演のリハーサル、ゲネプロ、初日を制作として研修することで、演劇上演の現場に触れながら、以下の諸点を学ぶ。①どのようなプロセスで演劇作品が初日を迎えるか。②（事前に学習しておいた）作品がどのように現実的に解釈され、物理的な諸条件（俳優の個性、劇場の規模、予算規模など）によってどのように細部が決まって行くか。③稽古最終日（ゲネプロ）と初日の本質的な違いは何か。④観客は作品をどのように受け取っていたか。⑤ピッコロ劇場は演劇作品をどのようなものと考え、どのようなものとして観客に提供しようとしているか。

これらのことを体験的に学ぶことで、ピッコロ劇場が地域社会にとってどのような働きをしているかを考察し、同時に広く演劇一般と劇場の持つ今日的な意義と課題について理解とビジョンを持つことを目的としている。

2 授業の進め方

事前にオリエンテーションを行う。オリエンテーションでは、ピッコロ劇場の創設の趣旨、特色、現在の活動状況について簡単に説明した上で、今回の作品と原作者、演出家、劇団の特徴を解説する。同時にインターンシップについての必要な心構えについて述べ、授業の狙いと何を主題として研修を受けるべきかを理解して貰う。

実際に5日間の研修を受ける。研修の最終日（公演初日）には、演劇学演習受講者（専修学生全員）が観劇する。普段、教室で同じ立場でいる学生たちが、初日には、それぞれ制作者（受付、チケットもぎり、場内案内者など）と観客という異なる立場に立つことで、演劇公演という「出来事性」（ヴィルマー・サウター）についてその一回性、約束性、社交性について認識を深める。

観劇と研修終了後に、授業「演劇学演習」において、インターンでの経験について、劇場の概要、作品の特徴、劇団の方向性などについて報告し、ディスカッションを行う。制作者の立場から見た演劇上演と、観客の立場から見た演劇上演との違いについて、相互に議論し、上演作品の芸術的特徴が、立場の違いによっていかに異なったものとしてあるのかを理解する。

最終的に、インターンシップ参加者全員はインターンについての報告書を、それ以外の観劇者（学生）は観劇レポートを執筆する。授業担当者（永田）はそれらによって成績評価を行い、インターンシップについての報告書は完成した後に、劇場側に提供し、劇場の活動のために役立ててもらおう。

2.1 ピッコロシアター・インターンシップ報告～地域に根差した演劇活動～

〔学生からの報告〕

文学部 3 回生 演劇学専修 00A09036 小倉 有希

1. はじめに

私たちは今回、10月4日から10月8日までの五日間、兵庫県立尼崎青少年創造劇場ピッコロシアターにて、インターンシップに参加させていただきました。アート・マネジメントの仕事について、また、関西における演劇界の現状や、劇場・劇団がどのようにして成り立っているのかなど、実務から知識まで様々なことを学びました。私にとってこの五日間は自分自身の将来を考えなおすきっかけとなり、多くのことを得る貴重な経験となりました。

簡単ではありますが、具体的なスケジュールとそこで教えて頂いたことをご報告させていただきます。

2. ご報告

10月4日

- ・館長さんへご挨拶
- ・劇場、施設、劇団概要の講義
- ・施設、仕込み見学
- ・ピッコロ演劇学校研究科見学

劇場概要	「青少年の自由な創造活動を促進し、あわせて県民文化の高揚を図ることを目的に、兵庫県立尼崎青少年創造劇場を設置する」という目的に則って昭和 53 年に開館。地域における舞台芸術の創造活動の場の提供、次世代の育成、表現活動の普及、及び地域に根差した事業の展開に主に取り組む。演劇を主体として創られたホールであり、観客よりも創り手の視点を重要視して作られている。
施設概要	ホールとしては大ホール・中ホール・小ホールから成る。大ホールは客席より舞台の方が面積が大きい、装置を置くために左右の袖口は広い、など演劇者の意見を多く取り入れた作りとなっている。中ホールは自分たちだけで使える照明・音響設備が整っており、人件費をかけず大ホールと同じような稽古が可能。小ホールは音楽向けに作られたもので、反響が大きい。役者の移動がしやすいよう、大ホールに隣接して楽屋がある。その他、演劇及びその他芸術活動のために使用出来る練習室、展示室、資料室等がある。別館には稽古場とミーティングルームが併設されている。
劇団概要	ピッコロシアター開館 15 周年・ピッコロ演劇学校開設 10 周年を記念して平成 6 年に設立。コミュニケーションの時代といわれている現代社会において、コミュニケーションを大切にしながら演劇の鑑賞機会の拡大や地域文化の振興を目指す。また、公演活動だけでなく、演劇の指導や相談業務等も幅広く行っている。

この日、私たちは全員で 12:30 に塚口駅へ集合し、ピッコロシアターへと向かった。事務所
で自己紹介をして、これから五日間お世話して頂く尾西さんに大体の概要を説明して頂いた。
まず館長さんにご挨拶をして、これから五日間お世話になる旨を伝えた。館長さんからは、イ
ンターシップ全体で学んだことを要約したようなお話を聞かせて頂き、また、今回の上演作
品である『しんしゃく源氏物語』についても少し教えて頂いた。館長室を辞した後、尾西さん
よりピッコロ劇場の概要を説明して頂いた上で、施設課の井上さんについて施設見学をした。
普段観客として見ることの出来る場所だけでなく、舞台袖や天井裏、奈落など関係者でなけれ
ば立ち入ることの出来ないようなところまで見せて頂き、演劇を嗜む身としてはとても興味深
く感じた。『しんしゃく源氏物語』の仕込みが既に始まっていたため、機材が実際に動いている
ところも見学することが出来た。一通りの施設見学を終えたのち、再度尾西さんから、ピッコ
ロ劇場・ピッコロ劇団・ピッコロ演劇学校の詳細についてレクチャーして頂いた。

こうして大方の基本的な知識を学んだあと、劇団部の田窪さんより、斜め向かいに併設され
ているピッコロ劇団の劇団部の説明及び施設見学をさせて頂き、『しんしゃく源氏物語』仕込み
を見学しながらどういった方々がどのような仕事をしているのかということ学んだ。

この日の最終スケジュールでは、ピッコロ演劇学校の稽古風景を見学させて頂いて解散とな
った。そこでは既に 11 月に行われる中間発表の稽古が始まっており、演劇の作り方というもの
を見ることが出来た。ワークショップに参加出来ないことは非常に残念だったが、良い勉強に
なったと思う。

10月5日 ・制作業務お手伝い

- 翌日のチラシ挟み込み準備・『しんしゃく源氏物語』予約チケットチェック・
- 『扉の向こうの物語』取扱所ごとのチケット分類
- ・ピッコロ舞台技術学校研究科照明講座見学

チケット 確認作業	当日清算および予約チケットのための封筒に書かれている情報と入っている チケットに相違がないか確認する作業。当日の流れとお客様の観劇に関わる。
チケット 分類作業	ピッコロ劇場、兵庫県立芸術文化センター、チケットぴあなど、販売所ごとに 決められた席番を分類していくという作業。様々な機関で私たちはチケットを入 手することが可能だが、取り扱い機関が全てのチケットを扱っているわけではな く、あらかじめ取り扱い席が割り振られている。それに従って一括で印刷された チケットを人の手で分類する。この際、芸文センターやぴあなどはインターネット 処理のためチケットの発券は必要ないのだが、ピッコロ劇団ではダブルブッキ ングなどを避けるため全ての席のチケットを発券し、それによって管理してい る。

インターンシップ二日目、この日は作業をお手伝いすることで実際の業務を体験することが出来た。主な流れとしては、翌日の挟み込みチラシ運び及びセッティング、『しんしゃく源氏物語』の予約チケットのチェック、『扉のむこうの物語』のチケット切り及び取り扱い所ごとの分類、という仕事であった。

作業を終えたあと、前日に引き続き、ピッコロ舞台技術学校の見学をさせて頂いた。この日は照明科の見学をさせて頂いたため、授業前に尾西さんより照明機材の予備知識を教えて頂いた。授業では照明の色作りについての講座で、舞台上に再現される複雑な配色がどのようにして作られているのか学び、解散となった。

この日の主な作業となったチケットに関する作業は、もしかすると当日の業務よりもお客様と深く関わりのある仕事で、絶対にミスの許されない作業である。しかし、こうした作業は普段は制作さんが一人で行っているらしく、それも全てはお客様のため、そして公演が滞りなく行われるためである。役者だけが舞台を創っているのではない、ということが、こういうところからも伺える。

夜の照明科の講座では講師の方が授業の準備をしている中、尾西さんに予備知識を教えて頂いた。照明の種類や名称、その用途など、照明は複雑で難しい。仕込みの時間も舞台美術に続いて最も多く割かれる部署である。もちろん尾西さんは照明科ではないが、制作の仕事をする上で全ての部署の基本的な知識は備えているという。それは制作という仕事の都合上、かかる経費の算出、及び全国公演において可能・不可能を判断するために必要なことらしい。異なる劇場を使う時、ある一つの劇場で可能であっても他の劇場で不可能な演出も存在する。例えば、本水を使えるかどうかなどがそれである。

このようなことを見ても、制作という仕事がいかに公演の全てに関わる仕事であるかということが分かるだろう。

- 10月6日
- ・演劇者の雇用、公立ホール、劇場における予算等についての講義
 - ・チラシ挟み込み作業
 - ・『しんしゃく源氏物語』紅組場当たり見学
 - ・ピッコロ演劇学校研究科・本科見学

雇用形態	一般的な演劇者の実態は、日中稽古のち夜間アルバイトで生計を立てることが主。これでは体を壊す者が多く、結果的に演劇を辞める、もしくはチャンスの豊富な関東へと進出する人間が多数となる。演劇人口の少ない関西に留めておくためには、生活の保障がまず必要である。ピッコロ劇団における雇用形態は、固定給としての月給に加えてステージギャラ+能力給という、ある程度必ず入る給与が保障されている。それだけで生活するには足りないが、そ
------	--

	ういった方面からも関西の演劇を活性化しようとする動きがある。
公立ホールとして	現在日本国内に存在する公立劇団は、水戸 ACM、ピッコロ劇団、静岡 SPAC の三つ（もっとも水戸 ACM はほとんどなくなっているに等しい）。公立としては二番目に出来たピッコロ劇団は、県立としては初めての団体となる。公立ホールは地域住民の税金を使って運営されるという特色から、様々な地元民の要望に応えられることが第一となる。そのため、必然的に多目的ホールが建設されることになる。それに対しピッコロ劇場は公立ホールでありながら演劇のためのホールとして最初に作られた劇場で、使用料も非常に安いと、多くの演劇者がピッコロ劇場を使用する。
劇場予算	劇場を保有するピッコロ劇団では、劇団部における年間製作費は約 1 千万円、劇場制作部における費用は維持費に 2 億、演目の購入費に約 200 万円と言われている。このように莫大な公演の費用を賄うために、外国ではレパトリー制が採られている。劇場の名作を 1 週間ごとに交互に演じ固定客からの収入を得る傍ら、新作の上演を行うというものだ。しかし、日本では作り捨てが多い。ピッコロ劇団においても、予算面で実現できないことが多々あるという。安定した収入源となる名作の創作が期待される場所である。

この日はチラシの挟み込みという重労働を控え、最初は尾西さんに演劇者の雇用についての現状や、公立ホールについての歴史や成り立ち、また劇場の予算は具体的にどれくらいかかるのかということなどを教えて頂いた。その後、制作部の重要な仕事の一つであるチラシ挟み込みを行った。これはどの劇団でも行われる作業で、入口で渡されるチラシの束を作る作業である。ホールが大きくなればなるほど大がかりな作業になり、挟み込まれるチラシの劇団の制作さんなども参加して、手の空いている人員を総動員して行われる。挟み込みが終わった後、尾西さんに再び先程のお話の続きを聞かせて頂き、『しんしゃく源氏物語』の場当たり(紅組)を見学させて頂いた。今回の公演においては、これが私たちが実際に初めて見る稽古となった。

夜は予定通りピッコロ演劇学校の見学をさせて頂いた。この日は研究科だけでなく本科も見学してもらい、研究科ではアップにも参加させて頂くなど、4日よりも多くのことを吸収することが出来た。

公立ホールとして成り立っているピッコロ劇場は、では地域の住民にどのような形で還元しているのか？やはり、他の私立劇団とは違い、公立劇団として果たさなければならない責任があるだろう。低価格での練習場やホールの貸出、ピッコロ演劇学校もその一環であるだろうし、被災地の激励活動などもピッコロ劇団だからこそ出来たことだ。演劇が好きでも続けられない理由の一つとして挙げられる生活の不安定さを解消しようという取り組みももっとしっかりしたものになれば、より機能していくに違いない。そのためにはまず、知名度をもっと上げるべきではないだろうか。ピッコロ劇団の作品はまだまだ知られていない。尼崎という地域は狭い。数少ない演劇文化の発信地として、劇場だけでなく地域全体の動きが必要だ。そういった意味

でも兵庫県立芸術文化センターという大きな劇場での公演は良い効果を生むと思う。でも、西宮という地域自体認知度が低い。私自身が実感していることだが、あんなにも素晴らしいホールなのに、芸文センターを知っている人間は、演劇人口の中にも少ないのだ。

10月7日 ・『しんしゃく源氏物語』紅組・白組ゲネプロ見学
 ・日本の演劇界、支援事業についての講義

演劇界の現状	<p>現在、全国で行われている演劇の約70%が東京都23区であり、観客の74%が首都圏に集中している。これは、演劇の制作母体となる事業者のほとんどが東京に本拠地を置いていることがある。近年、こうした状況を打開するため、各地に公立ホールが誕生し自主事業としての演劇公演が行われるようになってきた。ピッコロ劇団においても、昔は東京の劇作家や演出家を招き東京の作品を行っていたが、現在は関西の役者・スタッフで演劇を制作するという動きになっている。しかし、層の厚さが違う地方では興行が成り立つことは難しい。それは演劇業界全体に渡っても言えることである。日本の演劇業界は、同じ演劇観を持った人間が集まったカンパニー、制作スタッフが企画ごとにプロデュースする制作会社、直営の劇場を持ち自ら興行を行う劇場の3タイプの集団が自主興行を行っているというのが基本構造になっている。これらの団体は自らリスクを負って活動しており、レコード産業という基盤を持つ音楽業界に対して、演劇の産業基盤は非常に脆弱であるのが現状である。</p>
文化行政	<p>こうした現状を受け、支援事業として「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」が行われている。全国の劇場・音楽堂を重点支援劇場、地域の中核劇場、共同制作公演の三つに分類し、年間事業に対して助成するシステムである。これは、地域のリーダーとなる劇場を助成するという目的のもと設立され、創造のノウハウを身につけるといふことにも役立っている。また、施設面でも創作活動の支援に取り組み、ワークショップなどによる芸術文化の普及・育成も図られている。運営の最新動向としては、「指定管理者制度」がある。これは人件費の削減、自主事業費の削減などが見込める新たな制度である。しかしその反面、営利重視の運営が行われるようになるということや、継続性や引き継ぎが無いことから、丁寧さの減少への懸念も存在する。</p>
指定管理者制度	<p>議会の承認を受けた「指定管理者」であれば、公益法人に限らず、NPO法人、民間企業などが公の施設の管理運営を行う事ができるようになり、各地の公立文化施設で管理運営団体の公募が行われた結果、指定管理者として民間企業が参入する事例が相次いでいる。</p>

初日を翌日に控えたこの日は、ゲネプロが行われた。紅組のゲネプロを見たあと、劇団部田窪さんから日本の演劇業界についてのお話を伺い、その後白組のゲネプロを見学した。

ゲネプロとは本来、本番と同じ形で行われる通し稽古のことである。そのため時間も同じで行われるのが普通だが、今回は次の日の仕込みの関係上紅組と白組、順序が逆に行われた。それはスタッフ、キャスト共に本番にベストなコンディションで臨むためであり、前日と本番直前に余計な時間をかけさせないという配慮も感じられる。また、ほとんど全てのスタッフがゲネプロを観劇する。制作はゲネプロを観劇することによって見切れ席がないかどうかを確認し、当日券の発券を決める。ここで撮影された映像が、メディアやその他の宣伝・紹介に使用される。演出、役者、各プランナーたちも最終確認を行い、本番に備える。本当ならば一切の変更なく本番に臨まれるのが一番良い形だが、たいていは何かしらの変更、ダメだしがあるのが常である。

この日の田窪さんからのお話で、具体的に関東一極集中の数字を教えて頂き、愕然とした。また、一重に地域活性化といっても難題がたくさん存在することも知り、自分が出来ることは何かと深く考える機会となった。特に、子供を対象とした取り組みは難しい。初めて観る子たちに、どのような“初体験”を与えるのか？それはとても重要なことだ。楽しいだけではひと時の思い出で終わってしまうだろうし、かといって難しければ「眠かった」という記憶に留まるに過ぎない。例えば、テーマパークのショーが何度も子供たちを魅了するのは何故だろう？テーマパークという非日常な空間の中で、体全体を夢の中に取り込まれるからか。なんといっても子供たちを取り込むのはアトラクションである。様々な舞台装置、笑い、ことば、音楽。それらの工夫を凝らすことが、偏見を持った彼らを魅了する仕掛けなのではないだろうか。単なる会話劇に真を見出すのは、元々素養を持った子供だけだ。

- 10月8日
- ・『しんしゃく源氏物語』初日スタッフ参加
 - ・公立の文化施設についての講義

公立文化施設	現在、「公立文化施設名簿」に記載されている公立の劇場・音楽堂の数は約2,200である。しかし、平成の合併により、地方公共団体の数は1,700しかない。これはつまり、一つの市町村に平均約1.3施設存在することになる。こうした状況を打破するため、ピッコロ劇場ではピッコロ演劇学校・舞台技術学校を設立、2005年には新国立演劇学校という国立の演劇学校が設立された。また、1998年にはアートマネジメント学会が創立、文化の育成と普及を図っている。
--------	---

『しんしゃく源氏物語』初日、私たちはピッコロ劇場のスタッフとして本番のお仕事を体験させて頂いた。私たち6人は三人ずつに分かれ、白組・紅組で場内と受付を交代して二種類の業務にあたらせて頂いた。具体的な流れを次に示す。

受付

開場前：受付セッティング・仕事内容の確認

開場中：チケットもぎり及びチラシの配布、荷物お預かり、再入場の管理

開演中：着券整理、本番見学

終演後：お見送り、預かり荷物の返却、アンケート整理

場内

開場前：同上、座席の配置確認

開場中：座席案内、開演準備

開演中：本番見学、客席案内補助

終演後：扉の開閉、客出し、シートチェック

*シートチェック：全ての座席を触って、忘れ物・ごみ・汚れ等がないか確認する作業

1 ステ目の白組公演では、大阪大学をはじめ学校関係の団体客が多かったため、受付は休む間もなく開演を迎えた。恐らく場内も混雑していたのではないかと思う。しかし、団体での一斉入場だったため遅れ客は少なかったのではないだろうか。ピッコロ劇団では、着券整理は券種ごとに分類して行われた。宝塚バウホールでは分類は一切行われないので、劇場による違いが分かって面白い。一段落してから場内に入らせて頂き、途中から白組の公演を観劇した。ストーリーと演出はゲネプロで拝見させて頂いたのでそこに気を取られることはなく、それよりも初回であることと客が入ったことにより前日のゲネプロより勢いが増しており、“生きている役者” というものを客観的に観ることが出来た。

1 ステ目と2 ステ目の間、少し間があったので尾西さんより公立の文化施設についてのお話を伺った。

2 ステ目の紅組公演は夜公演ということもあり、客足は伸び悩んでいたようだ。しかし、1 ステ目のお見送りの際に「夜も来ます」と言って下さった方が何名かおり、最終的な入りを伺ってはいないためはっきりとしたことは言えないが、白組公演を観て紅組も観ようと思った方もいたのではないだろうか。ここで私は場内前方を担当していたのだが、お手洗いなどに関する質問の他に、座席移動に関する質問があった。「前方過ぎて観辛い」ということであった。空いているから移動したい、というような希望はよくあることであるが、その方はこちらにとても気を使って下さり、「もしもこの席を手配したのが劇団員の方なら申し訳ない」というようなこともおっしゃっていた。座席移動に関して詳しく聞いていなかったため受付の方に回すという対応になったが、こういったことにもきちんと対処出来るよう、仕事内容に関しては漏れなく把握しておかなければならないと感じた。

この日、私はアルバイトで学び、身に付けた自分自身の経験とスキルをフルに生かすことが出来たと思う。いつも現場では先輩の元で指示を仰ぎ、行動することが多いためあまり実感することは出来ない。しかし、チケットもぎりや場内案内をしている中で、学んだことは確実に身につけていることを知った。例えば、チケットもぎりをしている時はもぎりミスがなかった

だけでなく、該当扉もきちんと案内することが出来たし、1ベルが鳴ったあとや開場後などに訪れたお客様に対してのアナウンスもすることが出来た。場内担当の時は座席がなく、スタッフ用の椅子に座らせて頂いたので、本番を観るだけでなく場内も見渡すことが出来た。イベント派遣のスタッフを始めて二年、その時間が無駄ではなかったことを知り、とても充実感のある初日であった。

3. インターンを終えて

このインターンシップを終えて、自分の中の視点で一つ、変化したことがある。それは、地域と演劇の関わり方である。これまで演劇を最も身近なものに置いていながら、特別視していた自分があることに気が付いた。一種の崇高なものと捉え、オペラを観に行くことやミュージカルを観に行くことが一般的な自らの環境を、どこかで優越なものとしていたように思う。関東一極集中の現状を知っていて、文句を言っているにも関わらず学校への公演や地域交流を一つ下のものに見ていたのである。今まで自分の向上だけを目指していたが、今では関西の演劇の活性化にはどうすれば良いか、考えるようになった。

しかし、ただ単純に演劇を見せる、体験させる、だけではそれには繋がらないということも同時に学んだ。初めて舞台を観る子にとって、それがトラウマになるかも知れないということは最も懸念しておかなければならないことだろう。例えばこの秋、梅田芸術劇場にて劇団四季における大阪の小学校を対象とした芸術鑑賞事業が行われている。観劇をすることだけでなく観劇マナーを学ぶことも目的として行われている事業のため、私たちスタッフも注意を怠ることはない。しかし、舞台の楽しさではなくそちらの方が印象に残ってしまったら全く活性化には繋がらないだろう。「もっと舞台を楽しんでほしい」「大事にして欲しい」という気持ちがあるのは元々それを愛しているからで、知らない子にとってはただ窮屈なだけになってしまいかねない。初めて観る人間に対してこそ最も丁寧な出し物を創らなければならないということは、多くの劇団がそういったことを避けてしまう傾向の原因だろう。

私自身が取り組んでいる地域活性化として一つ挙げるなら、今、その地域交流の一環として行われている吹田市の演劇事業に参加していることだ。参加者はサラリーマンや歌手、主婦や先生など様々な職種、年代の方が集まっており、ほとんどが演劇未経験者である。詳しくお話を伺ってみると、よく観劇に行く、演劇が好きだという方が多いが、そうした方々に演劇を創る機会があるということはとても重要なことなのではないだろうかと思う。今回のその事業はオーディションこそあれ費用がかからない。やりたくても手が出せないという方の多くには、金銭面という現実もあることだろう。そうした現実を超えて演劇を身近なものに出来るチャンスである。

「実際に演劇を創りたいなら東京」——これは実際に劇場の制作として働いている方から言われた言葉である。関西にいるなら、演目を買ってくることしか出来ない。プロデュースは難しい。まだまだそれが現実である。やり方はどうあれそれをやろうとしていることは素晴らしいことだと思うし、そういった志を目の当たりにして、私の見解も変化した。変化は少しずつ

しかないかも知れないけれど、重要なことだ。演劇を愛する一個人として、やれることはたくさんあるはずだ。私自身は演劇というものを社会情勢と重ねて考えることはないけれど、ただの娯楽からメディアとしての機能を持った存在に返り咲くことが出来ればと思う。

5日間、本当にありがとうございました。

2.2 ピッコロシアター・インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部 3 回生 演劇学専修 新倉奈々子

私は平成 23 年 10 月 4 日～8 日の五日間、兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）でのインターンに参加させていただいた。以下、一日毎に内容をなぞり、報告をしていきたいと思う。

10 月 4 日（火） 一日目

- 13:00～ 尾西さんにご挨拶
藤池館長にご挨拶
資料室にて、井上さんよりピッコロシアターの概要および施設について説明・・・[1-A]
井上さんの案内により、館内の見学・・・[1-A]
資料室にて、尾西さんよりお話・・・[1-B]
- 16:00 頃～ 休憩
- 16:20～ 田窪さんの案内により、劇団部（別館）の見学・・・[1-C]
大ホールにて、仕込み見学・・・[1-C]
- 17:30～18:30 休憩
- 18:40～ 演劇学校研究科 授業見学・・・[1-D]
- 20:40 頃 終了

内容詳細・感想

[1-A] ピッコロシアターの概要、および施設について

井上さんより、平成 23 年度の事業概要や施設のパンフレットなどを見ながら、ピッコロシアターの沿革などについて概説をうかがう。その後、実際に館内をめぐり、練習室や大中小各ホール、舞台袖、奈落、音響設備などを見せていただいた。

現在ではピッコロ演劇学校に舞台技術学校、ピッコロ劇団と、演劇創造に繋がるあらゆる機関がそろっているように感じるが、ピッコロシアターの歴史の中で少しずつ発展してきた結果が今に至るのだ、ということが分かった。また、各ホールはコンパクトだが、それぞれ明確な目的のもと設計されており、機能性が高く感じられた。施設のその他の部分では、オストメイト対応トイレがあることに驚いた。このトイレができたのは近年だが、身障者用のトイレは開設当初からあったそうだ。そのお話を聞いていたので、大ホールに車椅子用スペースがないのが逆に少し意外だったが（最近改修されたそうなので特にそう感じた）、ただでさえコンパクトにできている客席を思えば不思議なことではないのかもしれない。

[1-B] 演劇の教育について等

音楽や美術の大学にはそれなりの歴史があるが、演劇に関して言うと、行政が役者を育成しようとした歴史はたった29年である。

そう教えていただき、言われてみればその通りだが、自分がこのことにまったく気づいていなかった事実にも驚いた。やはり、国立の大学がある音楽や美術などに対して、演劇は「国立の大学で学ぶようなことではない」という意識が当然のように存在しているように感じた。

[1-C] 劇団部見学、仕込み見学

別館にある、劇団の稽古場や資料の保管部屋を見学し、その後大ホールにて、田窪さんより解説をいただきつつ、仕込み作業を見学した。

劇団部では、過去に使われた衣裳や小道具の類が、全て資料として写真・寸法なども含め詳細に残されていることに驚いた。また田窪さんから、ピッコロシアターが制作側にとって、最も使いやすいホールの一つとして評価されていることを伺う。この劇場は大型トラックの横付けが可能で荷物の搬入がしやすく、楽屋から舞台もすぐで、客席はコンパクトで高低差が大きいため、遠くて舞台が見えなかったり視界が遮られたりすることがない。その時お話を伺っていたのは最後列の席だったが、確かに舞台との距離はそれほど感じず、最後列であることを意識させないような造りだと思った。

[1-D] 演劇学校研究科の見学

アップから始まり、合同発表会に向けた稽古の見学。1つのシーンに時間をかけ、何度も繰り返し稽古している様子が印象的だった。

10月5日(水) 二日目

- 13:00～ 別館から大ホールのホワイエへ、チラシ運び
翌日の挟み込み作業のために、チラシのセッティング
楽屋にて、『しんしゃく源氏物語』の予約分チケットの確認
『扉のむこうの物語』のチケット切り離し
『扉のむこうの物語』のチケットを、販売元ごとに分類・・・[2-A]
上記作業の確認を2回行う
休憩
中ホールにて、技術学校の準備の見学、尾西さんより照明に関して説明
・・・[2-B]
- 17:50～18:40 休憩
- 18:40～ 技術学校・照明コースの見学・・・[2-B]
- 20:40頃 終了

内容詳細・感想

[2-A] チケット分類

ダブルブッキングを防ぐため、兵庫県立芸術文化センターで行われる『扉のむこうの物語』のチケットを、販売元ごとに分類する。(例えば、ピッコロシアターはA1～15、B16～30・・・のように分けていく。)販売元が複数ある場合、このように席を割り振り、販売していることを初めて知ったので、興味深かった。

[2-B] 照明について、および技術学校照明コースの見学

技術学校の見学の前に、照明の種類や仕込みの作業について尾西さんより解説をいただく。その後、技術学校の照明コースの授業を見学。内容は、色作りについて。

私はこれまで演劇の制作をした経験が全くなかったので、一つの場面ごとに一つ一つ照明を仕込まなくてはならず、舞台上で演じる役者の上には、100個もの照明が吊られているということを知り、驚いた。演劇を作るために、こうして時間をかけ技術を学ぶ人たちがいて、一つの場面に工夫をこめる人たちがいる。演劇は総合芸術だ、という言い方がよくなされるが、この「総合」という二文字には、どれほどの人の思いや時間がつぎこまれていたのだろう、と改めて演劇の魅力を思った。私は今まで、役者や演出家にばかり注目しているところがあったが、これからは照明や装置、小道具、音響など、舞台の見方が広がるように思う。

10月6日(木) 三日目

- 13:00～ 資料室にて、尾西さんからお話・・・[3-A]
- 14:00～ チラシ 1200 部挟み込み
- 15:10～ 休憩
- 15:45～ 資料室にて、尾西さんのお話の続き・・・[3-A]
- 16:40～ 場当たり(白組)見学
- 17:50～18:30 休憩
- 18:40～ 演劇学校・研究科見学・・・[3-B]
- 19:40～ 本科見学
- 20:00～ 研究科見学
- 21:00 終了

内容詳細・感想

[3-A] 公立劇団について

日本の公立劇団は、1990年設立・水戸市立の劇団 ACM (Acting Company Mito)、1994年設立・兵庫県立ピッコロ劇団、1995年設立・静岡県立の劇団 SPAC の三団体のみである。海外では劇場に劇団が付属していることが多いが、日本はこのように極めて少ない。ピッコロ劇団以

外の二団体は、どちらも鈴木忠志氏によって提案され、実現したものの、市長・知事が交替したことで予算が削減されるという危機に立っただろう。そのように、公の予算を削減しようとしたとき、演劇の分野は、真っ先に削られてしまうものの一つだろう。私は、社会にとって演劇は不可欠なものであると信じたいが、しかし医療や介護の保障、障害のある人々の支援など、あらゆる人の毎日の生活に関わる基本的な福祉が、演劇よりも優先されるのも、もっともであるように思った。どちらも実現できることが理想なのだろうが当然現実には甘くなく、非常に難しい問題であるように感じた。

[3-B] 演劇学校研究科の見学

この日はアップに参加させていただいた。演劇経験のない私は、体を動かすものや声出しまではなんとかついていくことが出来たが、「ハッハッハッ」という発声からそのまま笑いへと続くメニューは、息と声が全く噛み合わず真似ることさえ出来なかった。笑う、という普段は何気なく見ている役者さんの動作だが、単純に出来るものではないことを、身をもって知った。

10月7日（金） 四日目

- 13:00 着、ゲネプロまで待機
- 13:30～ 紅組ゲネプロ見学・・・[4-A]
- 15:00～ 休憩
- ?～17:30 田窪さんよりお話・・・[4-B]
- 17:30～ 休憩
- 18:30(?)～ 白組ゲネプロ見学・・・[4-A]
- 20:00(?) 終了

※時間の記録を紛失したため、正確には不明に。

内容詳細・感想

[4-A] 紅白ゲネプロ見学

開演のブザー・アナウンスから始まりカーテンコールまでを本番同様に行う。今回は紅白の舞台装置の関係で当てはまらないが、通常のゲネプロでは時間まで本番に合わせて行うそう。それまで紅組の装置しか見ていなかったため、白組の装置がガラリと変わるのにまず驚き、中身もまた全く違う作品になっておりとても面白かった。

[4-B] 演劇業界の流れについて

財団法人地域創造による『The Theater Production Manual』の一部を参考に、田窪さんより演劇業界の大きな流れについて、解説していただいた。非常に興味深いお話ばかりだったが、日ごろ演劇学で学んでいるにも関わらず、知らない事やおぼろげな記憶であったことが山のよ

うにあり、勉強不足を痛感した。

また、阪神大震災の被災地にあり、震災翌月から「被災地激励公演」を行ったピッコロシアターとして、今年の東日本大震災の際に行った支援についてのお話も伺った。

10月8日（土） 五日目 『しんしゃく源氏物語』 初日

11:30～	開場前の準備
12:30～	開場 チケットもぎり・チラシ配布・場内案内・・・[5-A]
13:00～	開演（白組） チケットのカウント後、白組観劇・・・[5-B]
14:30～	終演 アンケート回収、お客様お見送り、会場内の忘れ物チェック
15:00 頃～	休憩 尾西さんよりお話・・・[5-C]
16:00 過ぎ～	休憩
17:00～	開場前の準備
17:30～	開場 チケットもぎり・チラシ配布・場内案内
18:00～	開演 紅組観劇・・・[5-B]
19:30～	アンケート回収、お客様お見送り、会場内の忘れ物チェック
20:00 頃	終了

内容詳細・感想

[5-A] 開場時の仕事

インターンの6人が2組に分かれ、片方が入り口にてチケットのもぎりとチラシ配布を行い、もう片方は会場内で案内を行った。昼公演では団体客が複数あったので、入り口は少し慌しかった。

[5-B] 紅白観劇

ゲネプロと違いはそれほどなかったが、本番を見て、やはり観客も含めての「演劇」なのだなと感じた。特に白組の回では、観客の反応が良く笑い声が大きく、その分役者さんの演技も生き生きとしているように見え、面白さを増していたように思う。紅白ともに、思いがけぬところで笑いが起こることが何度かあったが、きっと私も初めて観に来た観客としてそこにいれば、同じ箇所でも笑っていたのだろう。やはり、そのとき観客全体がどのような雰囲気だったのかによっても、観客の一人がそのときの上演に対して持ち帰る印象は変わるのだと思われる。その意味でも、一度として同じ演劇の上演はなく、とても面白いことだと思った。

[5-C] 公立ホールの現状、オーストラリアでのアート事情

ピッコロシアターは、文化庁による平成 23 年度「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」において、「地域の中核劇場・音楽堂」に指定されている。平成の大合併によって、市町村数は約 3300 から約 1700 にまで減少したが、全国に存在する公立ホールの数は変わることなく約 2200 である。つまりは市町村に 2～3 の公立ホールがあることになり、運営は非常に厳しくなる。そこでこの事業は、公立ホールの順序付けを行うことで、重点的な支援を行うことを目的としたものである。

また、アートマネジメントにおける先進国であるオーストラリアについてのお話も伺った。特に、耳や目の不自由な人向けの公演が当然のように行われている、という話が興味深かった。そのような人向けの事前レクチャーが設けられ、耳や目が不自由でも物語を理解できるよう図られているようだ。もちろん芸術を楽しむ権利は全ての人にあるが、芸術のバリアフリーとも呼べるこのことが、演劇においても可能だという発想は、日本ではあまりなされてきていないだろう。これは大いに学ぶべきものだった。

インターン全体を通して

私は将来、演劇のマネジメントのような仕事がしたいと思ってきたが、一方で分からないことがあまりにも多く、途方に暮れる思いだった。しかし今回、インターンとしてピッコロシアターで様々なことを知り、仕事の一部を経験させていただくことで、「劇場で働く」ということが現実味を帯びて感じられるようになったと思う。それと同時に自らの勉強不足は度々実感したので、これからアートマネジメントや色々なジャンルの演劇についてより積極的に学び、日本における演劇に関する諸問題について、自分なりに検討していけるようになりたい。また、考えなければならぬことは山積しているが、舞台裏を見せていただいたり、裏方の仕事について知ったり、公演初日の会場の空気をスタッフとして経験させていただいたことで、単純に「演劇が好きだ」という気持ちも強まったように思う。このような貴重な機会を与えて下さった皆様に、心から感謝したい。

2.3 ピッコロシアター・インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部 3 回生 演劇学専修 福本 伊歩 (00A09137)

10月4日

兵庫県立ピッコロシアターに到着し、まず今回のインターンシップに参加する6人全員で館長である藤池さんにご挨拶させていただきました。演劇が関東に一極集中している現状や、クラシックなどの音楽部門に比べて集客が困難であること、さまざまなキャリアの方々がこのピッコロ劇場に限らず演劇の世界では働いていることなどを教えて頂きました。

そのあと、資料室で尾西さんよりピッコロ劇場の概要を説明して頂きました。「尼崎」という地域に根差した劇場であり、「みる」側よりも「つくる」側である劇団視点の劇場づくりという特徴をもっているということをメインに用意して下さった資料を見せて頂きながら、お話を進めてくださいました。

途中で、井上さんより劇場内の施設を案内していただき、説明および見学をさせていただきました。市長の記念碑的な大ホールよりも、もっと実用的な意見を聞いて集約した結果、当時の尼崎市長は大ホールよりも小中ホールの建設を決め、今でもかなり珍しいことという話がとても興味深かったです。尼崎は労働者の文化が盛んでありながら、素人が活躍できる施設が存在しませんでした。そんななか、ピッコロシアターがちゃんと地域の人たちのニーズに応えたことから、地域と劇場のつながりが垣間見えました。この小中ホールを、地域の人たちへの用途を問わない練習・発表の場としての提供や、鑑賞劇場、実技教室、文化セミナー等多彩な自主事業の開催場所にしており、公的施設利用率は全国の平均が60%のなか、使う人を思いつくられたこのピッコロシアターは唯一90%を誇っています。一般的な公立施設の事務の受付はたいがい9時から17時ですが、ピッコロシアターは仕事終りのかたのご利用にも対応できるように、9時から21時まで開けています。使用料金も3時間900円と安く、学生などがバンドの練習にも気軽に利用することができ、障害者用のトイレも34年前からすでに設置されており、障害者にもひらかれた施設となっています。

大ホールは客席が急な階段状で、前の人の頭を気にせずに広々と観劇することが可能です。楽屋から舞台が近いため、お客様の表情がすぐにわかり、役者の肉声をききながら効果音を出すことができ、小さいながらもメリットの多いホールとなっています。また受付から楽屋、舞台袖まですぐに出られ、職員のかたがお客さまの状況を即座に見ることが可能です。満足や不満、動向を間近ですぐにキャッチすることが出来ます。

中ホールはもともとリハーサル室として使われていました。大ホールの舞台そのままの広さであり、音響も照明も利用可能で設備も整っています。大ホールと違い、中ホールはすべて素人で使用することができ、プロを必要としません。使用におけるアドバイスも職員の方がされているそうです。小ホールは第2のリハーサル室でもあり、音楽むきです。スポットライトの使用も可能で、ピアノの発表会などによく使用されます。また資料室では演劇など、舞台芸術

に関する充実した資料の閲覧、貸出も行っています。西日本では一番の揃えであるとおっしゃっており、確かに様々な文献があり興味深かったです。また、このインターンシップ中も、馬場さんが脚本をお借りしており、兵庫県民ではない人たちへもオープンに利用を許可されました。

井上さんから施設の維持に関して、報告をあげるだけやむしろ何もしない出向してきた県の職員たちではなく、プロパーな職員ばかりのピッコロシアターでは定期的に備品も新たにしたり、壊れたものを回収したりお客様のために常に満足する施設をつくる事が出来るとおっしゃっていました。

ぐるっと施設を一周したあと、また資料室に戻り尾西さんよりピッコロ劇場および劇団、演劇学校についての説明をして頂きました。ピッコロシアターが全国に誇れるものはなんと言っても学校と劇団を劇場が有していることで、ピッコロ演劇学校とピッコロ舞台技術学校では仕事や学校帰りの幅広い年代の生徒が夜間熱心に学んでいます。卒業生はそれぞれが学んだ知識、経験、卒業生同士のつながりを大切にしながら幅広い分野で活躍されています。突然に演劇部の顧問になった高校教師なども演劇学校に参加しているらしく、「必ずしもプロを育てているわけではなく、地域文化の向上に役立つ人間の育成をしている」という尾西さんの言葉が、すべてのように感じました。そしてこのピッコロ演劇学校を卒業し東京に夢を膨らませていった若者が挫折し、自殺したことをきっかけに「地域で育った人間は地域で活躍してもらおう」とピッコロ劇団の設立に繋がったというお話に考えさせられました。もしこのピッコロシアターがなければ、役者の夢をあきらめて自殺していた人がひとりでもいたかもしれません。たった一人でも、演劇を愛する人間を救ったとしたなら、とても尊い活動をされているのだと感動しました。

その後、劇団部の田窪さんに劇団部の説明および施設見学をしていただき、「しんしゃく源氏物語」のバトンづくりの仕込み見学をしました。仕込みには劇団の専門職、各分野のプロ、外部、プランナーなど様々な部門の方が参加していました。

夜はピッコロ演劇学校研究科を訪問し、11月頭におこなわれる中間発表の稽古を見学させていただきました。はじめての稽古場見学で、演出家の先生が台詞ひとつ、動きひとつを丁寧に細かく指示されているのを楽しみながら見させていただきました。1日通して演劇がつけられていく過程、というのが見ることができ、新鮮で充実した1日でした。

10月5日

制作部の仕事のお手伝いから始まったこの日は、翌日のチラシ挟み込みのチラシを劇団から劇場へ運びこみ、大ホールのホワイエにチラシくみのセッティングをしました。その後、「しんしゃく源氏物語」の予約チケットの席番号や日付、紅白があっているかのチェックをして、次回公演である「扉のむこうの物語」のチケット切り、取り扱い場所ごとの分類（チケットぴあ

など)にまとめ、それを確認する作業をしました。6人がかりで数時間で終わりましたが、ふだんはこれらの作業をメインとサブの2人でやると聞いて驚きました。手のあいたスタッフが手伝うらしいですが、インターネットでの予約取り扱いなどに比べ、すいぶん手間がかかる作業でした。

ピッコロ舞台技術学校照明科見学をする前に、尾西さんより照明の予備知識講座・照明の色づくりについて教えて頂きました。昨日から尾西さんの様々な分野の知識量の凄さにみんなで驚きましたが、制作の予算をたてるために照明のことを知っていなきやいけないとおっしゃっていました。昨日見学をした仕込みのメインだった「バトン」は照明をつるす器具で、これに設置するのを「さす」と言うそうです。照明はバトンにつられたものだけではなく、横やななめからなど様々な角度にあり、1つだけの明かりだと影だらけになるところを、複数の光をあてることにより立体となるのだと教えて頂きました。また、ピッコロ中ホールは照明においても、いろいろ実験ができる場所です。「照明」といっても、様々な機械があり、エッジがぼやける光や、模様を入れる光、点灯や消灯がすばやい…など全く知識のなかった私にとって、「これはどの照明なのか」と舞台の楽しみが増えました。

ピッコロシアターは水も砂もつかえますが、本水がつかえるのは排水がしっかりしている舞台で、砂もしかり。大ホールは客席が少なくとも舞台面積が広いので、旅公演はキャパ違いの劇場のせいでなかなか舞台セットを運びこめないのだとか。ピッコロシアターよりも客席が多くて大きな劇場でも、ピッコロシアターほどの舞台面積をもつ劇場はなかなかないみたいです。ピッコロ舞台技術学校照明の見学は、バトンづくりや色づくりの作業を見学したのですが、先生がおっしゃった「舞台は芸術家だけのものではない」という言葉がとても印象的でした。

10月6日

尾西さんより、演劇者の雇用、公立ホールについて、劇場の予算についてなど制作部の仕事についてお話しして頂きました。劇団が県からある程度のギャラが与えられている(固定給)ゆえに、他の劇団の役者に比べまだ生活がなりたっているらしく、地域に還元しているぶん地域からもかえってきているのだと感じました。ピッコロシアターは公立の演劇施設としては二番目ですが、県立としては一番目のホールです(ちなみに公立の一番目は静岡の芸術文化センター)

劇場の制作部とは、劇団が公演の企画書をつくって売るのを劇場が買う仕事をするそうで、ピッコロ劇団は年に30本ほどのステージをしています。人を育成していくことを目的としているので、安く提供し、演劇の種まきをするとおっしゃっていました。兵庫県はそれに価値を見出してお金をだしてくれています。一本つくるのに一千万円。一か所300万くらいの利益なので、旅公演で3か所以上はまわりたいそうです。

また海外でよくある定番の作品を毎日かわるがわる公演する「レパトリー制」が日本にはなく、日本の演劇は新作が多いとのことでした。確かに、ヒット間違いなしの作品をかわるがわるずっとやっている劇団はなく、なにかしら新作が目につく気がします。

また劇場の仕事において「貸館」は地域住民の信頼を得るために必要で、それをせず観劇の場だけとしていたら住民の反感をかった例もあるのだとか。他のこまごまとした仕事の中に、チケットの席があります。チケットが半分しか売れていないようなときはバラバラの席に意図的に散らせて座らせるとたくさん入っているように錯覚できるので、役者も観客ものるらしいです。色々な仕事があるのだと興味深く聞かせていただきました。

途中、昨日セッティングしたチラシ挟み込みを1時間で1200部挟み込みました。

その後、尾西さんよりお話の続きをしていただきました。今回の新しやく源氏物語は時代物で、衣装にお金がかかるので制作部としては時代物をやりたくても、お金の桁があがるので悩むらしいです。和物は専属の衣装さんがいないので、管理が難しい。外部から衣装をかりて、そのスタッフがついてくれるらしいですが、人件費も衣装代もお金がかかって困るそうです。また、つくったセットなども地下には装置をおけないので倉庫に持っていか潰してしまうらしいです。衣装や小道具は基本的に保存しているそうです。

紅組の1シーンの場当たり見学をしたのち、ピッコロ演劇学校・本科見学アップ参加・中間発表稽古の見学をさせていただきました。

10月7日

まず、紅組のゲネプロを見学させていただきました。昨日の場当たりで1シーンは見ていましたが通して観たときにはまた違う印象をうけ、「おもしろいな～」と素直に観劇してしまいました。

観劇後、劇団部田窪さんからこれまでの日本演劇業界についてのお話をさせていただきました。劇場のボーダレス化、東京への集中、助成の仕方など…さまざまな人たちのさまざまな動きがあって今の演劇が確立され、認められ、また変わっていく、その最中に私たちがいるように感じました。資料にのっている役者や、知らない劇場、有名な劇団、どれひとつとってもピッコロシアターのように「演劇を愛している」人たちの支えがあったのだと行間を読んでしまいました。

とても興味深いお話のあと、白組のゲネプロを見学しました。まずセットがだいぶ変わっていたことに驚きました。紅組と違う点がいくつもあり、紅白の比較がとても面白かったです。両方観てこそ味わえる作品のように思えました。

ゲネプロ中は劇団部に残すための資料としての映像撮りもありました。山本さんがいろんな席に座り、舞台袖が見えたりしないかを確認していました。また紅白の上演順が初日と逆なのは、白組のセットをそのまま翌日に使用できるためです。

10月8日

ついに最終日を迎えたこの日は、まず上演前の制作業務のお手伝いから始まりました。チケットのもぎり、前日に挟み込んだチラシの配布、会場内案内の手伝いに分かれて、それぞれの仕事を体験させて頂きました。私は昼の部ではチラシ配布、夜の部では場内案内を担当しまし

た。昼の部は白組からで、観劇にはわたしたちが所属する大阪大学の演劇学の仲間や、宝塚北高校の演劇科の生徒さんたちなど学生から老人の方まで幅広い層の方々がたくさん観劇されていました。チラシ配布の際に、高校の生徒さんたちが笑顔で挨拶をくれ、「ありがとうございます」とひとりひとりに言われたことが印象的でした。とつても気持ちの良い見習うべき振る舞いだと思います。宝塚北高校の生徒さんたちは、田窪さんが「よすぎる客」と表現されたように、挨拶やマナーの他、上演時の拍手や歓声（笑い声など）も他の一般のお客様よりも大きく、出演者にとつても制作側にとつても気持ちのいい客のように感じました。

上演後は、アンケート回収&整理の制作業務のお手伝いをさせていただきました。アンケートは回収後にかかるく目を通し、あまりに心無い意見など役者さんたちを傷つける可能性のあるものがないか制作部のほうで先にチェックするのも大事なお仕事の一つでした。私が目を通した限りは、そのようなアンケートは無く、みなさん丁寧に書かれていて私も参考になる意見ばかりでした。

白組の本番が終わると、紅組本番までのあいだ尾西さんから公立文化施設についてのお話をさせていただきました。重点支援劇場、中核劇場のお話を通して、経営難に陥る劇場を国がどう助成し、劇場どうして支援しあい活性化をはかっていることをはじめて知りました。

そのあと、紅組本番の前に昼の部と同じように制作業務のお手伝いをしました。今回は場内案内を担当し、席をお探しのお客様に声をかけ、座席までご案内させて頂く役です。スタービーイングという会社で何度も劇場案内のバイトをしたことがあるのですが、毎回座席を間違えないようにすこしドキドキする仕事です。場内案内時にはペンライトを貸して頂き、暗い足元を照らしながらご案内しました。

夜の部で、車いすのお客様が来場された際のピッコロシアターのみなさんの対応が大変あたたかかったのが印象的でした。車椅子からおりられて座席での観劇が困難なご様子だったので、最後尾の座席の後ろにある手摺のところに車椅子をとめてのご観劇をすすめられていました。お客様はお連れ様と話し合った結果、車椅子から座席にうつられて観劇されたのですが、その際もずっとお手伝いしていらっしやって、すべての方に観劇を楽しんでいただくための細やかな心遣いに感激しました。そして夜の部の上演後は、客席内の忘れ物チェックをしました。落としてしまったのか、客席の下にチケットの忘れ物がたくさんありました。みんなでお客様を見送って、アンケートの整理をしたあと、劇団の方たちにお礼を言って5日間のインターンシップは終わりました。

5日間のインターンシップを終えて

このピッコロシアターが「地域と密着した」特徴をもつことが、他の劇場には無い特別な魅力の最大の理由であると身をもって感じることができました。「地域の人たちがいつでも演劇、

音楽、舞踊などの舞台芸術に気軽に触れ、創造する喜びや楽しみを体験できる広場、心の劇場でありたい」という劇団の方針が、派手さをもたないながらも心のこもったあたたかな劇場にしていました。そして劇場のどのスタッフの方とお話ししても、このピッコロシアターを愛し、誇りに思っていることや、創立から現在にいたるピッコロシアターに関わった全てのひとへの尊敬と感謝が伝わってきて、これから就職活動を控えている3回生の私にとってはとても理想的な職場でした。私もピッコロシアターの方々のように自分がその仕事を愛し、誇りに思える職につきたいです。

演劇にかかわる仕事、とくに劇場で舞台制作の仕事がしたいと考えていた私にとって、この5日間ではたくさんの「リアル」にであうことができました。そのなかでも、やはり一番の問題は「お金」だったように思えます。招待客をよんでも次に来てくれるのは3割くらいで、それが利益に繋がる結果にはならないお話や、ヒットはなかなかでないことなど、「演劇はもうからない」という言葉を何度も耳にしました。大阪大学の演劇学の授業においてインターンシップの報告をした際に、「どうして今回ピッコロシアターは『しんしゃく源氏物語』を上演にえらんだのか」という質問を受けたのですが、その質問をわたしたちも職員のかたに聞いておらず、不思議に思いました。「しんしゃく源氏物語」が大ヒットをとばすような作品ではないことは明らかだし、儲けに繋がるとは失礼ですがとても思えません。しかし、「創造者の育成」を掲げるピッコロシアターにとってこの紅白にわかれて上演する「しんしゃく源氏物語」は、わたしたちインターンシップ生にも、観劇にきていた宝塚北高校の生徒たちにも、中学生たちが一緒に取り組む題材としても、たしかに勉強にはなるものだと感じました。そこには舞台としての「演劇の魅力」よりも、「演劇とは」といった課題をつきつけられているように感じられます。しかし、やはりちゃんと儲けがでてお金をうむ作品でなければいつまでも勉強題材の舞台どまりになってしまうのではないのでしょうか。関東一極集中のこの現状を打破し、関西の演劇を盛り上げていくには、やはりこんなに素晴らしいスタッフの方々が揃って、劇場の歴史をもつピッコロシアターがもっともっと中心になっていくべきだと感じました。地域にとどまるだけではもったいないくらい、どの大手の劇団にもひけをとらない真心のあるピッコロシアターだからこそ、地域の人々のその先へすすんで行ってほしいと思いました。また、これから舞台制作に関わりたいと思っている自分も、どんな作品を、どんな層をねらって、どんなふうにつくっていかれば、演劇は盛り上がるのか考えるきっかけともなりました。

2日目でピッコロ舞台技術学校の先生が「舞台は芸術家だけのものではない」とおっしゃっていましたが、その言葉が最も印象に残る言葉となりました。私は演技もできないし、人を魅了する美しさもないし、脚本もかけません。非凡な才能を持たない普通の人である私でも、大好きな演劇に、舞台に関わって生きていきたいと思っていたので、この言葉がこれからもずっと私の支えになるはずです。

5日間、本当にありがとうございました。

2.4 ピッコロシアター・インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部 2 回生 演劇学専修 立道 悠理

○概要

期間：10月4日～10月8日

インターン先：兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）

ピッコロシアターの秋公演「しんしゃく源氏物語」の準備過程を、仕込みからゲネプロも含め初日まで見学し、さらに実際に制作の仕事を手伝うことで舞台製作の裏側について学ぶ。また、制作の尾西さんや劇団部の田窪さんから演劇関連のお話を伺う。

○日程と詳細

10月4日

1日の流れ

- ・尾西さんからピッコロシアターの概要についての説明を受けたのち、井上さんに施設の紹介・案内をしていただいた。
- ・尾西さんより、ピッコロ演劇学校・ピッコロ舞台技術学校についての説明を受ける。
- ・次に、劇団部の田窪さんに別館の案内をしていただいた。
- ・「しんしゃく源氏物語」の仕込みの様子を客席から見学した。
- ・最後に、ピッコロ演劇学校研究科の授業を見学した。

〈施設紹介〉

もともと尼崎は労働者の演劇が盛んであり、市の演劇部も存在していた。こうした中、ピッコロシアターは、アマチュアの人々が自由に活動できる場所として開場した。芝居を作る側の立場も考慮した劇場の作りになっており、例えば大ホールの舞台の大きさは、「客席よりも舞台を大きくしてほしい」という使う側の意見を取り入れ、客席の2倍となっている。

また、運営上気にかけていることとしては、受付の時間などがある。公立施設では夜の受付がないのが実態であるが、ピッコロシアターでは、こうした状況をふまえ、夜9時までの受付が可能となっている。施設の維持にも力を入れており、備品はつねに新しいものを取り入れ改修も頻繁に行っている。

〈施設内見学〉

練習室は全部で3つあり、文化活動を行う人々に向けて安く貸している。障害者用のトイレなども完備しており、細かいところにまで配慮が行き届いている様子がうかがえる。

中ホールは固定席ではなく、さまざまな用途に対応している。照明設備もあり、何から何まで自分たちでできる、というこうしたメリットがあるため、小劇団がよく利用する。広さはちょうど大ホールでの動きがそのままできる程で、リハーサル室としても利用される。大ホール

では、音響は上手・下手の両方で可能となっており、また、最新技術の機器も取り入れている。私たちが見学した時はちょうど「しんしゃく源氏物語」の仕掛けをしている最中だった。

〈ピッコロ演劇学校・ピッコロ舞台技術学校〉

1983年に、兵庫県が演劇人を養成しようとピッコロ演劇学校を創立した。日本初の公立の演劇学校で、地域文化の向上に貢献できる人材を育てることが目的であり、必ずしもプロの養成のみを行うのではない。兵庫県はこうした文化活動への支援に力を入れている方であり、この話に併せて、国が演劇人を養成しようとし始めたのはつい最近のことだということも伺った。

1992年にはピッコロ舞台技術学校ができた。劇場の技術スタッフの育成が目的である。なぜバブル後のこの時期にできたのか？それは、バブル期に計画されたホールがこれからどんどん作られていく見込みがあり、劇の作り手も必要だがそれを支える技術者も必要だという考えからだそうである。

〈ピッコロシアター別館見学〉

劇団部や稽古場のある別館を見学した。ミーティングルームでは小道具や衣装も作っており、ミシンが置いてあった。ここで作ることができないものは外部に依頼するそうである。

過去公演の写真・資料が保管されている部屋があり、ここにアンケートも保管されている。

この時再び大ホールを見学し、楽屋から舞台まで段差なくすぐに来られること、大道具の搬入口も近いことなどを聞いた。これも作り手を重視したピッコロシアターならではの配慮だと感じた。

〈仕込み見学〉

「しんしゃく源氏物語」の主人公、貧しい姫である末摘花に合わせて、セットの縁側の部分はわざと所々バラバラにしてあった。舞台監督・外部の方・大道具を作る外部の会社・照明・劇団員自身も参加して班に分かれて作業をする。

10月5日

1日の流れ

- ・6日に行われるチラシ挟み込み作業の準備として、チラシを大ホール前のホワイエまで運ぶ。
- ・「しんしゃく源氏物語」の予約チケットの確認作業、「扉のむこうの物語」のチケット仕分け作業を行った。
- ・作業の後、尾西さんより照明についての説明を受ける。
- ・ピッコロ舞台技術学校照明コースの授業を見学した。

〈チケット確認・仕分け作業〉

「しんしゃく源氏物語」の予約チケットを、枚数・日付・時間・料金などに間違いがないかを念入りにチェックする。続いて、12月に兵庫県立芸術文化センターの方で行われる「扉のむこうの物語」のチケットを、芸文・ピッコロシアター・ぴあ・ローソンなどのチケットを扱う

場所ごとに、座席番号に注意しながら分ける。もし間違っていたらダブルブッキングという大変な事態になるので、絶対に間違いのないよう2～3回見直しをした。これら一連の作業は、普段は制作の方が1人で行う作業なので、1日では終わらないこともあるそうである。

〈照明〉

照明を仕込む棒をバトンと呼び、照明を「さす」という表現をする。よって、1番バトンにさしている照明を「1サス」という。フレネル・平凸・ITO・パーライトなどのさまざまな種類の照明を紹介していただき、それぞれの用途についても詳しく教えていただいた。

〈ピッコロ舞台技術学校照明コース見学〉

尾西さんに事前に説明していただいたので、用語などがわかりやすかった。仕込み図という図面を見ながら機材を設置していく。バトンを下ろす時などさまざまな場面において、安全のため大きく声を出すことが大切になってくるということを学んだ。また、作業中真っ暗になると危ないので、明りを消すときは必ず別の明かりをつけてから行う。

10月6日

1日の流れ

- ・尾西さんよりピッコロ劇団や衣装について、他にも仕込みについてのお話を伺う。
- ・尾西さんのお話の合間にチラシの挟み込み作業を行った。
- ・「しんしゃく源氏物語」紅組の場当たりを見学。
- ・ピッコロ演劇学校研究科の授業を見学する。この日は私たちが稽古前のアップに参加させていただいた。

〈尾西さんのお話〉

ピッコロ劇団では、兵庫県から固定給をもらうことができる。震災後でも劇団員を増やすなど、兵庫県は多くのお金をかけているそうである。

衣装のお話では、時代物はお金がかかるということを知った。なぜかという、今回の「しんしゃく源氏物語」では床山（かつら）も含め衣装は専門会社から借りているそうだが、この時にスタッフや着付けの人も雇うことになるため、お金がかかるのである。また、衣装自体も高い。

仕込み作業においては仕込みの順序も重要であることを知った。先にセットなどの装置を組んでしまうと、バトンが下りてこられないために照明のつり込みができない。よって、最初に照明から仕込む。バトンを上げることを「とばす」というそうだが、一度とばしたバトンはもう下ろすことができないため、とばす前の回線チェックはとても大事になってくる。

〈場当たり見学〉

場当たりでは本番同様に衣装も着てセリフもしゃべるが、芝居の中身に対するチェックというよりは、照明・音響と合わせるためのテクニカルな作業である。同じシーンを繰り返しチェックしていた。

10月7日

1日の流れ

- ・この日はまず1時から紅組のゲネプロを見学した。
- ・田窪さんより演劇のボーダーレス化、東京への集中の実態、演劇業界の構造などについての詳しいお話を伺う。
- ・7時から白組のゲネプロを見学した。

〈ゲネプロ〉

ゲネプロは最後に行うフルの通し稽古で、ここで最終チェックが行われる。初日は先に白組が公演を行うので本来ならゲネプロも先に白組が行うべきだが、装置の転換などの手間を省くために逆になっている。制作の方はゲネプロにおいて、さまざまな座席に座って、袖の中が見えたりしないか、売ってもよい席かどうか、どの花道を使うのか、などを細かくチェックする。このため、制作の方はゲネプロに必ず入るそうである。

〈田窪さんのお話〉

日本では古典から商業演劇、新劇、小劇場、舞踏、高校演劇などのさまざまなジャンルが併存しており、これらの領域の間関係が希薄で、ほとんど相互交流がない状態が続いてきたが、現在ではその垣根が低くなってきている。このボーダーレス化の長所は、明るくにぎやかになってきたこと、短所はそれぞれのジャンルの力が弱くなってきたことだと田窪さんはおっしゃった。

東京集中の実態について。全国で行われている演劇のほとんどが東京に集中しているのだが、こうした背景には、演劇の制作母体となる事業者のほとんどが東京に本拠地を置いているということがある。地方の難しい所は、東京に比べ客がなかなか集まらないことである。

〈「しんしゃく源氏物語」紅組と白組の比較〉

共通して、音楽は和風というよりも現代的で、笑いを誘う場面が随所にあり、とっつきやすい芝居という印象だった。もみじ、藤などの季節の移ろいを表すセットもきれいだった。

紅と白で異なる点

配役・・・紅組では末摘花を男性が、女官たちを女性が演じ、白組では末摘花を女性、女官たちを男性が演じている。

セット・・・紅組ではくずれかけの今にも倒れそうな柱、白組は障子。几帳の色もそれぞれ違っていた。また、紅組の場合は芝居の中で右近が通るため、セットの前に人が通れる程の幅があったが、白の場合はそれがなく、セットは舞台すれすれまで来ていた。

衣装・・・全体的に紅組の方が派手で、白組は地味な色で統一されている印象を受けた。

叔母の登場シーン・・・紅組ではこのシーンにおいて右近、左近も含め全員が舞台上にいたが、白組では姫と少将と叔母の3人のみ。また、白組では右近と左近が冒頭のシーンの後ほとんど出てこないが、紅組では最後まで出てくるうえに、その性格も脚色してあった。

全体的に、衣装や登場の仕方など、紅組の方が派手だと感じた。また、紅組で出てきたセリフが白組では出てこなかったりもした。白組の方がストレートで原作に近いイメージだった。紅組では姫が落とし穴にはまるシーンがあったが、これは姫役が男性であるからこそその演出だと私は感じた。白組での少将と宰相が格闘するようなシーンは、女官役が男性だからこそその面白さがあった。

10月8日

1日の流れ

- ・「しんしゃく源氏物語」初日。1時からの白組公演で劇場案内の手伝いを行った。
- ・次の紅組公演まで尾西さんに指定管理者制度についてのお話を伺う。
- ・6時から紅組の公演。このときはチケットもぎりとチラシ配布を手伝った。

〈仕事について〉

劇場案内では、お客様を座席まで案内したり、開場される方に挨拶をしたりした。上演後に遅れて入ってきたお客様への対応については、もしもその方の座席が行きにくい場所だった場合は別の空いている席に座っていただく、ということを知った。大きな荷物を抱えている方に対しては、田窪さんがこちらで預かることを提案していた。つねにお客様から目を離さない細かい配慮が大切なのだと感じた。

チラシ配布では、相手が受け取りやすいように、チラシを渡す向きも重要になってくることを学んだ。上演後、すべてのお客様が開場されたのを確認してからチケットの半券を種類別に分類し、枚数を数えるという作業を行った。

〈本番とゲネプロの違い〉

白組でも紅組でも、仕事を終えた後に上演を観劇させていただいた。ゲネプロとは違ったシーンで笑いが起きていたり、また、白と紅で同じセリフでも言い方や演じる役者によって笑いが起きたり起こらなかったりした。観客が入っていると、その反応によってこんなにも芝居の印象が変わるものなのか、と面白く感じた。

〈指定管理者制度〉

指定管理者制度とは、「地方公共団体の公の施設において、民間法人その他の団体を指定し、その管理権限を代行させる制度」である。エレベーター会社や清掃会社が多いが、問題点としては、そういった企業が安く入札するため、劇場の維持面においてお金をかけられず、運営がずさんになってしまうということである。例えば、照明の球が切れても入れ替えができない、などである。

尾西さんは、もっと劇場は大きくなれるのではとおっしゃっていた。

○インターンを終えて

今回は、制作の実態や演劇界の現状・課題についてなどのお話を伺う機会もたくさんあり、

新たな視点が広がった。さらに、制作の仕事の手伝いを通して、観客として劇場に来ているだけでは知ることができないような‘裏側’を見ることができたのがよかった。

また、演劇学校や技術学校といった演劇人養成の場を実際に見学できたことでも、さまざまな知識が深まった。

ゲネプロ・本番の両方を観ることで、「芝居の最後のピースを埋めるのは観客である」という言葉の意味がわかった。これが、観客の前で俳優が生で演技をするという舞台の面白さだと思う。

課題として何とか打開策を見つけなければ、と感じたのが、尾西さんのお話の中にあった「チケットが売れない現状」である。今回の「しんしゃく源氏物語」でも、埋まったのは大ホール400席のうち白組・紅組それぞれ100～200席くらいであった。演劇離れが進む中、どうやって集客を増やすか？困難なことだとは思いますが、例えば広報にもっと力を入れる、といったことを考えた。しかしこれをするためにはさらにお金が必要になるという問題に直面してしまうのも確かである。具体的な解決策はまだ見つけられていないが、インターンを通してこうした課題について改めて認識することができたと思う。

先程述べた広報についてだが、今回の「しんしゃく源氏物語」について言えば、紅組と白組の2つの作品を見比べる面白さをもっと全面的にうたった宣伝の形があっても良かったのではと感じた。私は紅組と白組の両方を観て、1つ1つもちろん面白かったが、その演出の違いや男性・女性の違いから生まれる別の面白さといったものを強く感じたからである。なので、初日に仕事を手伝っていて、両方観たという人が思っていたよりも少なかったのが残念だった。

将来演劇と関わる現場で働きたいと思っているので、今回のインターンはそれにつなげるためのよい経験となった。このインターンを通して得た新たな視点をこれからも持ち続けていき、さらに広げていきたい。

2.5 ピッコロシアター・インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部 2 回生 演劇学専修 00A10119 馬場 絢子

1) 日程概要

今回、2011 年 10 月 4 日～8 日までの 5 日間、兵庫県立尼崎創造劇場にインターンに行き、色々な話を伺った。

以下に、インターンの日程および概要を示す。

10 月 3 日 ・永田教授によるオリエンテーション（ピッコロシアターについて）

10 月 4 日 ・挨拶

- ・館長によるお話（演劇の東京一極集中の現状、ゲスト講師のお話と絡めて）
- ・劇場制作の方によるお話（ピッコロシアターの概要、劇場作りの意図）
- ・同上（ピッコロシアターの施設説明）、ピッコロシアター見学
- ・同上（ピッコロシアター、ピッコロ劇団、ピッコロ演劇学校の説明）
- ・劇団制作の方によるお話（製作、再利用、保存、過去の劇団公演）、見学
- ・『しんしゃく源氏物語』仕込み見学
- ・ピッコロ演劇学校見学（研究科）

10 月 5 日 ・劇団制作の手伝い（チラシ運び、チケットチェック、チケット分類など）

- ・ピッコロ演劇技術学校見学（照明科）

10 月 6 日 ・劇場制作の方によるお話（雇用、公立ホール、予算について）

- ・劇団/劇場制作業務手伝い（チラシ挟み込み）
- ・劇場制作の方によるお話（予算、助成金、ホール、現状と対策）
- ・『しんしゃく源氏物語』紅組場当たり見学
- ・ピッコロ演劇学校見学（研究科、本科）

10 月 7 日 ・『しんしゃく源氏物語』紅組ゲネプロ見学

- ・劇団制作の方によるお話（演劇史、劇場史、助成金について）
- ・『しんしゃく源氏物語』白組ゲネプロ見学

10 月 8 日 ・制作業務手伝い（もぎり、チラシ配布、会場内案内）

- ・『しんしゃく源氏物語』白組公演見学
- ・制作業務手伝い（忘れ物チェック、アンケート整理）
- ・劇場制作の方によるお話（公立文化施設について）
- ・制作業務手伝い（もぎり、チラシ配布、会場内案内）
- ・『しんしゃく源氏物語』紅組公演見学
- ・制作業務手伝い（忘れ物チェック、アンケート整理）
- ・挨拶

以下では、これらの内容について、日程を超えて同一項目ごとにまとめて報告する。

2) 劇場および劇団の沿革

ピッコロシアターは正式名を「兵庫県立尼崎青少年創造劇場」といい、「青少年の自由な創造活動を促進し、あわせて県民文化の高揚を図ること¹⁾」を目的に設立された。設立当初は「勤労青少年」という言葉が使われていたが、今では「勤労」を省いている。1950年代から始まった劇場建築ブームの流れで、1970年代、音楽ホールを中心に専用ホールの建設が増す。また、貸し館に特化した受け身の劇場ではなく、「発信型」「創造型」の劇場建築の構想も起こり出し²⁾、その流れの中で、初の演劇専門の公立創造型劇場としてピッコロシアターは1978年に設立する。阪神随一の工業地域として発展した尼崎は、職場演劇も活発で古くから演劇祭等が催されていたこともあり、劇場建設は支持を受けた。劇場設立構想委員会には多くの青年代表が参加し、演劇者の意向を強く取り入れた劇場となっている。

ピッコロ演劇学校は、演劇人の東京一極集中や劣悪な労働環境への反省から、関西で活躍する演劇人を育て地域文化を発展させることを一方の目的に、また一般人の演劇参加を通じてコミュニケーション能力等の向上を促すことをもう一方の目的に、1983年に誕生した、日本初の公立の演劇学校である。現在でも原則週に2回、夜間に授業が行われている。授業料も安く、年15万円かからない。普段の練習はピッコロシアターで行い、講師として全国各地から著名な演劇人がやってくるのも特徴である。

ピッコロ舞台技術学校は1992年、公立文化施設の建設ラッシュで技術スタッフの不足が問題になる中、スタッフ育成機関として開校する。これは公立初の舞台技術専門の学校であり、年間授業料10万円、「美術コース」「照明コース」「音響コース」の3コースに分かれて週に2日、夜間に行われる。コースは1つしか選べられないため、3年かけて全コースを受講する生徒もいる。卒業後はプロスタッフとして活躍する人が多く、実際のピッコロシアターの設備を使って学べるのが特徴となっている³⁾。

ピッコロ舞台技術学校設立から2年後の1994年、演劇学校および舞台技術学校を持つ劇場の集大成として、劇団員20名のピッコロ劇団が誕生する。これは県立初の劇団である（公立初は水戸芸術館の劇団ACM）。ピッコロ劇団は「地域文化の活性化、地域に根付いた劇団作り」をコンセプトに立ちあがり、関西で活躍する人材によって構成されており、ピッコロ演劇学校出身の団員も存在する。

3) 施設概要

ピッコロシアターでは本館入口をはいってすぐ左側に事務室があり、楽屋へは事務室の前を通らないといけないため、客の様子や演者の様子が解りやすいという利点がある。また、事務所から段差なしに楽屋、舞台袖、舞台上、さらに客席のF列（オーケストラピットを除いた最前列）に行くことが出来る。展示室、更に奥に、練習室、資料室、お手洗いも含めて、これら

1 公益財団法人兵庫県芸術文化協会兵庫県立尼崎青少年創造会館(2011)「平成23年度 兵庫県立尼崎青少年創造劇場・県立ピッコロ劇団事務概要」(pp.2)

2 社団法人全国公立文化施設協会(2010)「平成21年度 地域の劇場・音楽堂等の活動の基準に関する調査研究報告書」別冊(pp.16-17)

3 兵庫県立尼崎青少年創造劇場(2011)「演劇学校・舞台技術学校の概要及び入学生の状況等」

の間に段差はない。また、設立当初から、障害者用お手洗いが設けられている。今では多機能トイレも存在し、バリアフリーな作りとなっている。

2010年度、練習室は、3つ合わせて87%の利用率を誇る。地域の人に多く使ってもらおうという構想から、使用料は安い。資料室は尼崎市民でなくとも借りることが出来る。資料室の蔵書は、上演パンフレットやビデオなども合わせて約24000点、演劇を中心に音楽、舞踊などの舞台芸術資料を揃えてある。特に現代演劇に関する書籍は5500冊近く、伝統演劇1000冊強、テアトロ・悲劇喜劇等の雑誌2000冊強と、演劇に関する蔵書は西日本一だという。上演台本やパンフレットは文学座、円、地人会、高校演劇が主である⁴。本を購入する予算は取られておらず、寄贈によって運営されているらしい。

小ホールは半円型のホールで、天井も斜めになっている。壁は反響板で音響効果が良く、音楽の演奏会や発表会向けであり、ステージライトもついてある。利用率は2010年で95%、うち洋楽が80%と最も多く、演劇は17%である。音響が良すぎるため、演劇にはあまり向いていないようだ。中ホールは15m×15mあり、大ホールのステージの大きさを再現出来る。鏡張りの壁面にはバレエのバーがつけられ、 Horizont も作る事が出来る。上部には一周回路があり、バトンはもちろん手すりのどこにでも照明をつけられ、何シーンでもプログラム可能となっている。そのため、演劇・音楽・舞踊どれにも利用出来、大ホール舞台でのリハーサルにも向いている。2010年利用率は94%、利用内容は65%が演劇、洋舞20%、また洋楽にも利用されている。演劇学校の利用が多く、自主事業による利用が54%を占める。大ホールは袖や奥舞台も合わせると舞台床面積が客席面積の2倍あり、非常に使いやすい大きな舞台となっている。客席は一つずつ段差になっており、最後尾からも舞台がはっきり見える。音響はフルデジタルの最先端機材を使っており、上下両袖で可能である。利用率は90%、内訳は演劇が63%と多い。

前述の通りのバリアフリー設計、また排水設備がしっかりしているため舞台上で水・砂等が使用可能なこと、劇場前にトラックが停められること、搬入口が大ホール舞台袖に直通でやはり段差がないことなどから、1998年雑誌「せりふの時代」にて、劇団関係者アンケートにより歴代最優秀劇場に選ばれている⁵。

ところで施設面について、大ホールのオーケストラピットが気になった。客席が400席程度のホールに、オーケストラピットが必要とは思えない。利用内容から見ても、オーケストラピットを使用する演目は少ないだろう。また客席として使用する場合、自分の頭がちょうど舞台の床面にあるのでは、見難いのではないだろうか。舞台装置を組む作品では、なおのことである。オーケストラピットとして作られたにもかかわらず、通常は客席にされているあのスペースは、少しもったいないように思われた。

劇団専用の別館は、シンプルな建物である。過去公演をまとめた部屋には、使った小道具や衣装、公演映像や内容等、書類とデータ両方で残してある。また、ミーティングルームと呼ば

4 公益財団法人兵庫県芸術文化協会兵庫県立尼崎青少創造劇場(2011)「平成23年度 兵庫県立尼崎青少年創造劇場・県立ピッコロ劇団事務概要」(pp.26)

5 いのうえひさし、他(1998)小学館「季刊せりふの時代7 春号」

れる、小道具や衣装を作る部屋がある。なるべく低予算で公演を行うために、自作出るものは自分達で作るらしい。稽古場は2階にあり、ピッコロシアター大ホールの舞台より少し小さい。舞台装置の搬出時には、道路に面した2階の入り口が大きく開かれ、クレーン等を使って運び出すことになる。晴れの日には楽であろうが、雨の日にはなかなか大変な作業であろう。隣接して建物があるため、騒音等の問題が一切クリアなわけでもない。稽古場の状況がもう少し良くなればいいな、と思ったのであった。

4) 劇団運営

ピッコロシアターは現在、自主事業にも力を入れている。2010年度の自主事業の実施結果を見ると、鑑賞劇場は計16事業（内共催7事業）、文化セミナー計2回、実技教室6事業が行われている。プロデュース公演も幾度か行っている。自主事業公演において一番採算が取れるのは落語らしい。入場人数も多く、舞台装置や出演者・衣装などに出費がかからないためである。一方劇団公演では、大道具、小道具、衣装、音響、照明、プランナー、人件費など出費が多く、ピッコロ劇団の舞台でも数千万円かかるそうだ。これに加え、ふつうは劇場利用料も必要となる。ちなみにピッコロ劇団は、ピッコロシアターを使う時に利用料は払っていない。これにより、無料で長期間劇場を押さえてリハーサルや公演が打てるため、劇団側からすると利点であるが、劇場側からするとその間貸館運営が出来なくなるばかりか、頻度によっては地域の信用問題にかかわる問題になることもあるという。

また、ピッコロ劇団はアウトリーチ活動を頻繁に行っている。劇場・劇団がアウトリーチ活動を行う目的は、潜在的観客を増やすことと、地域還元である。公立劇団・公立劇場が行う場合は特に後者が期待されており、子供や高齢者等への働き掛けは重要となる。ピッコロ劇団では小学校に行き行って公演を行ったりワークショップを主催したり、あるいは子供を舞台に立たせたり、劇場内におけるアウトリーチ活動の一環として中学校・高校等を呼んで鑑賞事業を行ったりしている。老人ホームや病院にも出向しているのかは聞きそびれたが、自主事業の一環として、学生を対象とした職業体験および学校の新人職員研修も行っており、2010年度は計37名の研修生を受け入れている⁶。こういった体験活動によって、これまでその存在を知らなかった層、あるいは知ってはいたけれども関わったことのなかった層へ効果的にアピールすることが出来る。また、芸術・文化に触れる機会を増やすことで、主催団体以外の芸術界への動員につなげることも可能となる。

前述の通り、劇団スタッフによる費用を抑える努力は大変大きい。例えばピッコロ劇団は、小道具や衣装など自分で作れるものは出来る限り手作りするようにしている。作ったあとは公演が終わるとバラしてしまい、倉庫代も抑えている。以前は淡路にもあった倉庫も、今は伊丹に1個借りているだけらしい。これに対し、新国立劇場などは設立時から保存・分解の方法および予算を視野に入れ、公演時の装置・道具等は大きな1つのBoxにまとめられるように作り、そのBoxのまま保存しているそうだ。ピッコロ劇団ではそこまでの予算がないが、だからとい

6 公益財団法人兵庫県芸術文化協会兵庫県立尼崎青少創造劇場(2011)「平成23年度 兵庫県立尼崎青少年創造劇場・県立ピッコロ劇団事務概要」(pp.17)

って落語ばかりやるわけにもいかない。そのため、劇団公演に来てもらえるような仕組みを長年模索しているようだ。

ピッコロシアターは県立劇場であるが、ピッコロ劇団員は公務員というわけではない。劇団員は2年毎の契約で、固定給16万程度にステージギャラが1万円程度、外部出演、能力委員会によって定められるプラス給を合わせた賃金で働いている。他の民間劇団と比べ、安定した固定給があることで、夜間アルバイトをして体を壊したり劇団活動に支障をきたしたりすることは避けられているという。地元で腰を落ち着けて劇団活動を行えることを目的に公立劇団として発足したピッコロ劇団は、その意味で目的を達成していると言えるが、これだけを頼りに一生生活することは難しい。助成金や運営母体に乏しい民間の劇団と比べると恵まれているが、現実的に、この給料で生涯の仕事として成り立つとは言いがたいこともまた事実である。

5) 指定管理者制度と助成金

ピッコロシアターは兵庫県芸術文化協会という公益財団法人が運営している。兵庫県芸術文化協会は1967年に財団法人兵庫県社会文化協会として設立され、1978年からピッコロシアターの管理運営を受託している。一度ピッコロシアターの管理運営を財団法人兵庫現代芸術劇場に移管したが、1999年に兵庫現代芸術劇場と統合して名前を財団法人兵庫県芸術文化協会に変更し、ピッコロシアターの管理運営を再受託。2011年、公益財団法人になった⁷。

ピッコロシアターは文化庁による平成23年度「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」において、地域の中核劇場として採択され、3800万円強の支援を1年間受けている。兵庫県では芸術文化センターが重点支援劇場として採択されており⁸、ピッコロシアターから研修派遣を行っている。現在、「平成の大合併」により公立劇場・ホールの設置主体である自治体が再編成され、1999年時点で3300弱あった地方公共団体が、2010年度末には1700近くまで減少したにも関わらず、公立劇場・音楽堂の数は約2200のままとなっている。そのため現在では、地方自治体による支援が統制されたり、重点的な劇場とそうでない劇場を区別したりといった工夫がなされている。

それ以外にも、ピッコロシアターではCSR活動の一環として、兵庫県から支援を受けている。また、個人による寄付、企業による寄付（メセナ活動）も受けている。

6) オーストラリアとロシアの劇場

オーストラリアの劇場について、劇場業務部の尾西教彰さんによる話を示す。オーストラリアでは大自然で行うアウトドアスポーツが多く、劇場に籠る歴史が浅い。そのため、意図的に人を劇場に呼ぶ工夫があるようだ。公立劇場は定期的に近隣の学校と提携して公演を行ったり、フェスティバルを開催したり、カジノと提携したりして観客を誘致している。また、公演をうつ場合は必ず視覚障害の人のために舞台にあがって装置を触らせたり、内容や情景を言葉で説明したり、聴覚障害の人のために字幕をつけたりしなければならない等といった制度があり、

7 公益財団法人兵庫県芸術文化協会「兵庫県芸術文化協会の概要
(<http://hyogo-arts.or.jp/arts/kyokai/kyogaiyo.htm>)」(最終閲覧：2011.11.08)

8 文化庁(2011)「平成23年度『優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業』採択について」

様々な人に開かれた公共のものとしての位置を確立しようとしているらしい。

ロシアの劇場については、劇団文芸演出部の島守辰明さんに聞いた。ロシアでは生活の身近に劇場が存在し、若い男性にとって「女性を連れて劇場に行く」ということが一種の成功体験、ステイタスとなっているようだ。劇場の座席も高いものから安いものまで幅広く、一番安いものだと数十円・数百円で見られるらしい。また、上演は夜遅くにやっており、劇場内のバーやラウンジでのお喋りも盛んで、社交場として機能しているという。新作も上演するが、レパートリーも多く、典型的・古典的なヨーロッパ型の劇場として存在しているようだ。

私がオーストリアに暮らしていた時のことを思い出すと、劇場は確かに非常に身近な存在であり、上等な席はもちろん安い席も沢山あり、家族連れも多かった。劇場には専用の劇団があり（バレエ・オペラが多かったが）、子供向けのレッスンをを行う学校が併設されている所もあった。ラウンジやカウンター等の溜まり場も存在し、バックスペースツアーを定期的に行う等、市民に対して開かれた場であったように思われる。しかし何より、ヨーロッパの劇場は他国からの旅行ツアーに組み込まれるように、「見世物」としての地位が確立していることが大きな特徴である。日本では、「劇場に行く」というのが趣味としてもあまり浸透していないのが現状である。歌舞伎や能をはじめ、日本古来の伝統芸能が「家」を基準に続いてきた制度であること、そこから続く劇団が「志」によって結束された集団であること、それゆえ初代の団員が去ったり劇団代表がいなくなったりすると解散してしまうことが多いこと、内輪として発達した舞台芸術がほとんど「公」よりも「私」による支援で運営されていること、観客と役者の関係が非常に密接で、ある種の排他性を持ち、芸の技巧よりも成長・進歩を見守る関係になりやすいこと、公立文化施設や劇場に歴史がなく、地域を代表する場としての価値が認められていないこと、劇場のチケットの高さ、上演期間・上演時間の不便さ等、様々な要因が考えられる。日本に数少ない公立劇団として、ピッコロの存在価値をもう一度捉え直したいと思ったのであった。

7) まとめ

上述のように、ピッコロシアターおよびピッコロ劇団は、様々な取り組みを行っている。日本の演劇界全体の問題もあれば、法整備の問題もあるが、歴史や制度についていくつか取り上げて調べたなかでも短期的な施策が多く、確実に良いと確信出来るものがそうそうなかったことも興味深かった。しかし、ピッコロシアターの運営だけでなく、もっと広く話をしていたら、非常に有意義で有難いインターンとなった。特に日本に劇場が少ないとずっと思っていたが、実はそうではなく、少ないのは定期的に一定以上の評価を受ける劇団、特に公立・国立劇団がないのだということは目から鱗であった。また国からの支援が少ないと一般には言われているが、実際にそうなのか、支援が良い方法で行われていないだけではないか等、考えるきっかけとなった。

インターン中、チケットの整理やチラシの挟み込み等、雑用もやらせてもらった。地道な作業が多く、もぎり等初めての経験も多く、興味深かった。また、各ホールの見学や演劇学校・舞台技術学校の見学等で、これまで触れたことのなかった舞台裏の仕組みを垣間見ることが出来たのも良い経験である。想像以上に舞台裏で働くスタッフの人数が多く、ゲネプロと本番の

違い等も体験し、舞台を作るということにより広い目を持つことが出来たような気がしている。

インターンで学んだ内容に関して、この報告ではあまり触れていないが個人的にいくつか調べることがあった。これまで知らなかったことが多く、非常に良いお話をしてもらったと感謝している。インターンの成果として、以上をもって報告とする。

2.6 ピッコロシアター・インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部 2 回生 演劇学専修 緑川 岳良

1. インターン概要

兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター、以下ピッコロシアターとする）にて10月4日から8日までの5日間、以下の3点を主な目的として研修を受ける。

- ・劇場制作の一員として実際に制作業務を手伝い、劇場の制作業務について知る。
- ・研修期間最終日が公演初日である兵庫県立ピッコロ劇団の第41回公演「しんしゃく源氏物語」の仕込み・場当たり・ゲネプロ・本番を見学することで劇場に入ってから作品がどのように出来上がっていくかを学ぶ。
- ・劇場・劇団の方にお話を伺い、県立の劇場・劇団について知識を深める。

2. インターン一日目（10月4日）

インターン初日、私の緊張は大変なものだった。というのも私はこのインターンまでピッコロシアターに一度も行ったことがなく、どういった劇場なのか全くわかっていなかったからだ。劇場について知らなかったからこそこれを機にピッコロシアターについて知れたらと思いインターンに参加したのだが、一度も訪れたことがない劇場で研修させてもらうというのは劇場の方からしたらどのように見えるのだろうかと不安に思っていたわけだ。

劇場には予定の時間よりも数分早く到着し事務所で待たせていただいた。まず館長さんにご挨拶をすることになっていたのだが、早く到着してしまったので挨拶の前に劇場職員の尾西さんからこのインターン全体の予定を説明してもらった。劇場や演劇学校の見学、制作業務の手伝い、その合間にピッコロシアターやピッコロ劇団についての説明を劇団部の方や尾西さんからしてもらい、七日八日はゲネプロと本番の見学・チケットも切りの手伝いをするといった感じであったが、予定がどうなるかは劇場での本番の準備の進度次第な部分もあるので実際にその時にならないとわからないとのことだった。そういった予定の不確定さは本番前の劇場の忙しさを感じさせた。

予定の時刻になり館長室に案内してもらいピッコロシアターの館長である藤池さんと対面した。挨拶の後、藤池館長から演劇の関東への集中に対して関西でもなんとか演劇を盛り上げていかなければならないといったお話をしていただいた。

藤池館長への挨拶を終えると資料室に案内してもらった。資料室には戯曲などの様々な演劇関係の書物やピッコロシアターで行われた高校演劇の大会の上演台本まで保管されている。この資料室を私たちはインターン初日待機場所として使わせていただき、基本的にはここでいろんなお話を伺った。

まず尾西さんがピッコロシアターの概要について資料を用意してくださり、それについて説

明していただいた。

ピッコロシアターが建っている尼崎という土地はもともと市の職員が演劇をしていたりと、労働者の演劇が盛んに行われていた土地であり、そんな土地に県立の文化施設を建てることになった。当時公立の文化施設といえば客席が2000席あるような大きなホールを作るのが主流であったが、しかしそれではなかなか使用率が伸びないということが問題となっていた。そのため当時の市長は芸術活動を行う側の立場、創る側の立場に立った劇場にしようと、アマチュア劇団の意見を取り入れて劇場を作ることにした。その結果、アマチュア劇団の「2000人もの観客呼ぶことはできないので、それなら客席よりも自分たちの立つ舞台を広くしてほしい」という意見をもとに、客席を396席に抑える代わりに客席の二倍の面積を誇る広い舞台が作られ、昭和53年8月19日に開館した。

この広い舞台以外にもピッコロシアターでは使う側目線の工夫が施されている。例えば事務所を通らないと楽屋に入ることはできない設計にすることで、劇場側と利用者が顔を合わせ互いに反応を伺いやすくなっている。他にも、普通公立施設の受付が16時までであるのにピッコロシアターは21時まで対応していたり、施設の備品を常に新しいものに入れ替えたりしている。特に私は受付時間が長いことが非常に利用者の助けになっていると感じた。

これらの利用者の立場に立った劇場づくりの精神の甲斐あって、ピッコロシアターの施設の利用率はここ二年90%を超えている。また「セリフの時代」という雑誌の使いやすい劇上位ランキングで一位に輝いたこともある。

次に井上さんより施設の説明と施設内の案内をしていただいた。練習室から、小・中・大ホールまでそれぞれの部屋やホールが持つ設備まで丁寧に説明してくださった。小ホールは音楽の演奏会向きで中ホールは演劇向きであり、それは反響率の違いであるという話が非常に興味深かった。また大ホールには正直なところそれほど最新式の機材を備えているようには見えていなかったのが設備の新しさに驚いた。なかでも一番の驚きは照明のオペレーター卓であった。光回線で舞台袖の卓と客席後ろの操作室の中の卓と連動しており、新しい機材を入れつつ必要な古い機材も残し重大なミスが起こったときしっかり対応が取れるように配慮されていた。

練習室やホールだけでなく、エレベーターやお手洗いも新しく整備されていた。エレベーターは地震などの非常時に最寄りの会にとまるようになっていたし、お手洗いも障がい者の方にも使用しやすいようにさまざまな設備が整っていた。

劇場内を案内してもらったあと資料室に戻り再び尾西さんからお話を伺った。今度はピッコロ劇団やピッコロ演劇学校・ピッコロ舞台技術学校について。

ピッコロ演劇学校は地域文化の向上に貢献できる人材を育てることを目的として昭和58年に開校された。これは劇場というハードな要素は完成したがその劇場を使用するソフトな部分が地域に整っていなかったからである。一年後より専門的に学ぶための演劇学校研究科が開校する。続いて平成元年に役者だけでなく裏方スタッフの人材も地域から育てようとピッコロ舞台技術学校が開校した。この後押しとなったのが劇場の増加に伴う技術者の人材不足だった。そしてその五年後の平成6年に兵庫県立ピッコロ劇団が発足する。これはピッコロシアターが県

立劇場として、ほかの地域から劇団を招致して公演してもらうだけでなく自ら芸術を発信していくことのできる文化施設になるために作られた。また同時に、ピッコロシアターが演劇学校や舞台技術学校で養成した人材が実際に演劇活動をするとき地元から離れ東京や大阪に行ってしまうと結局地域の文化の向上にはつながらないため、演劇学校・舞台技術学校の卒業生が地元でも活動できるような場所を設けようということも創られた目的の一つであった。

尾西さんのからの説明の後、劇団部の田窪さんから劇団部についてのお話と劇団部の施設の案内をしてもらった。

ピッコロ劇団の一年の間に、6月と10月に本公演があり、8月ごろにファミリー劇場という子供にも分かりやすい親子向けのお芝居をピッコロシアターで公演する。ほかの劇場を使わせてもらって行う外部公演というものもピッコロシアターで行う内公演の合間に行っている。役者には毎月一定額の給料が給付されるがまだそれだけで生活していくことは難しいため役者の方はエキストラやCM出演で別途給料を集めているというのが現状である。

劇団部は別館と呼ばれる建物にあり、事務所や倉庫、小道具や衣装の作業場、稽古場が一つの建物の中に混在していた。倉庫には過去公演の衣装や小道具アンケートなどの資料が大量に保管されていた。古い公演では写真とネガも保存されており現代のデータ化された記録との時代の差を感じさせられた。稽古場は前日まで役者たちが稽古をしていたらしく、まだ練習用の衣装や舞台の目印が放置されていた。小屋入りする前のこの稽古場での稽古も見てみたかったがそれはかなわず残念だった。

一日目の最後は演劇学校の見学だった。この日は演劇学校の本科ではなく研究科の稽古を見学させてもらった。アップから始まり、アップ後すぐに中間発表に向けての台本に沿った稽古をしていた。一番強く印象に残ったのは研究科の講師であり中間発表の演出をする島守さんの指導の丁寧さだった。生徒に演出をつける際、設定を一つずつ確認したり実際に自ら演技して見せたりとかなり優しい演出だなと感じた。そういった演出家の雰囲気稽古場全体に浸透していて、かなりいい雰囲気の稽古場であったように感じた。しかしそれと同時にこれだけ優しい、悪く言えばぬるい稽古場でよいのだろうかとも思った。

このように一日目は劇場や劇団の人から話を聞くことが中心だったので、インターン中で最も内容の濃い一日であったように思う。それに加えて初日という緊張もあり、この日の研修が終わるころには想像以上に疲労を感じていた。

3. 二日目 (10月5日)

二日目は実際に制作業務のお手伝いをするのが中心であった。

二日目最初の作業は6日に行うチラシの挟み込み作業の準備だった。劇団部の事務所から大ホールの入りのホワイエまで外部の劇団から届いたビラやピッコロ劇場次回活動のチラシを運んだ。すべてのチラシが運び終わると包装されているのを破りチラシを机の上に並べていく。挟み込み当日にも何団体かチラシが増えるのだが、とりあえず劇団や劇場・劇団員にかか

わりが深いものから先に並べ、この日のチラシに関する作業は終了した。

チラシの運び込みが終わると次は週末から上演開始する「しんしゃく源氏物語」のチケット予約チェックを行った。用意した予約チケットの日時・枚数・種類が誤っていないかを一つ一つ確認していく作業で、地味ではあるがもし間違いがあれば見に来ていただくお客様に迷惑をかけることになってしまうので念入りに行わなければならない重要な仕事である。

その後二日目の制作業務の手伝いの最後に12月に上演予定の「扉の向こうの物語」のチケット切りと取扱い所ごとの分類を行った。チケット切りは四枚ひとつづりになっているチケットをバラバラに切り離していき、席番号のふってあるものは順番通りに並べ、番号のないものは別途束にしておくという作業を延々で行う。普段は劇場の制作担当の方が一人か二人で行っている作業を私たちは6人で行っていたため一人あたりの負担が三分の一だったにもかかわらず、実際にお客さまの手元に届くチケットを扱っているという緊張感とチケットの枚数が大量であるためなかなか終わりが見えないこととに疲労を感じた。

切り離しが終わると続いて取扱い所ごとに分ける作業に移る。すべての席を一括してピッコロ劇団で予約を受け付けているわけではなく、ぴあやローソンといったところでもチケットの予約を受け付けているためどの席をどこが取り扱うかは事前に決められている。この作業はその分類の通りにチケットを分けておくことで、客席のダブルブッキングを避けるために行う。そのため入念にチェックする必要がある、一度仕分けた後も数回確認する人間を変えて確認を行った。この作業は本来チケット千切り同様に制作の方が一人か二人で行う作業であり、ほかの仕事の合間を縫って行くと4日ほどかかるのだそうだ。

制作業務の手伝いの後は舞台技術学校の見学の予定だったが、予定よりも早く制作手伝いが完了したため、尾西さんが照明の予備知識として灯体の種類や名称、そこから出る光の特徴などを授業前に簡潔に教えてくださった。尾西さんは制作の方だけでなく予算を出すときに照明のプラン図を見ておおよその値を出さなければならないので、そのために必要な最低限の照明の知識は持っているとおっしゃった。もちろん音響や舞台のことについても同じように知識を持っていらっしゃるのであろうことを思うと、一つの分野のことしかわからない状態で劇場で働くのは困難がありそうだと感じた。

尾西さんの事前講義の後舞台技術学校照明コースの授業を見学した。この日はいくつかの灯体にゼラを入れて明かりづくりをする授業だった。講義形式で光の三原色のことなどについて講師が話してから、つり込み・シュート・明かりづくりの流れで、サイドから光を当てた時にどうなるかなどを実際に灯体に明かりをつけながら授業していた。コードの処理の仕方など細かなところもしっかり指導していたのが印象的だった。

4. 三日目 (10月6日)

この日は尾西さんからお話を伺い、途中チラシの挟み込み作業をお手伝いして、その後尾西さんにお話の続きをしていただいた。それから場当たりを見学し、一日の最後に演劇学校の見

学をさせてもらうという流れだった。

尾西さんからは演劇関係者の雇用や公立のホールとその制作に関わる話をお聞きした。

役者の給料というのは難しい問題で、一ステージにつき数万円という額を払ったとしてもその公演の稽古は2か月前から始まっているとすると割のいい仕事とは言い難い。そのため役者の多くは演劇活動のほかにアルバイトをする必要に駆られ結果無茶をして体を壊すということが少なくない。そういった背景もピッコロ劇団ができた理由の一つにある。つまり役者に定額の給料を支払うことで最低限の生活を守り、腰を据えて演劇活動に専念できるようにということである。

日本の国内には公立の劇団が3つ存在し、一つはピッコロ劇場、残りの二つが水戸 ACM と静岡県舞台芸術センター（以下 SPAC とする）である。水戸 ACM は鈴木忠志の呼びかけで作られた日本最初の公立劇団であったが、市長が変わった時に予算が削減されたことに伴って鈴木忠志は SPAC へと移ってしまった。

公立のホールには多目的ホールの問題がある。公立のホールは住民の様々なニーズに答えようとするため多目的室を設置するのだが、実際には多目的室は演劇の稽古用と楽器の練習用とのどちらにも特化しないように作られており、結果どちらにも向かない無目的な空間になってしまった。

また公立のホールでは普通貸館と自主事業の二つの事業を軸に据え経営している。なぜ貸館が必要かという、主な理由が二つ挙げられる。一つ目は公立のホールである以上地域の住民が利用できないとなると地域住民が不満を覚えること。二つ目は自主事業を行おうとすると費用がかさむからである。貸館ならばどこかの劇団の完成している芝居をいくらかで買ってこればいいだけなのだが、自主事業となると上演にかかる費用に加えて製作費や維持費が発生してしまうのだ。ピッコロ劇団の維持費も、それを全部使えば年に非常に多くの公演を買ってくることができるのだが、ピッコロ劇団は公演を打つだけではなく演劇学校の講師を務めたりと地域で演劇人の能力を養成する役割も担っているので、維持費が高いのか安いのかは簡単には判断できない。

劇団には自主公演と売り公演がある。自主公演はどこかの劇場を借りてそこで行う公演のことで、売り公演はどこかの劇場から依頼を受けてそこで行う公演のことである。つまり自主公演は場所代が必要となりその費用を含めてチケット代で回収しなければならないが、売り公演ならば場所代はらず劇場から給料がもらえることになる。そのため劇団としてはできるだけ売り公演を行いたい、自分たちの公演を買ってもらいたい。そこで制作部の方は過去の公演の映像や観客動員数の資料を使って営業を行い、自分たちの公演を売り込むのである。

またそういった営業のほかにどんな公演を打つのかの企画を立てるのも制作の仕事の一つだ。その際、時代物の芝居は公演費がほかのジャンルの芝居に比べて格段に高くなってしまいうのでなかなか企画できないそうだ。

挟み込み作業は私たちを含めだいたい20人がかりで行った。ただ延々と数種類のチラシを一枚ずつ取り重ねていき束にするというだけの作業を、正確な時間は覚えていないが、一、二時

間繰り返すという作業で、この作業は思ったよりも指に疲労が来る作業だった。普段何気なく劇場を訪れ何気なく眺めていた挟み込みチラシがこのような手作業で行われているということが実感できた。

尾西さんのお話の後、「しんしゃく源氏物語」の紅組の場当たりを見学した。ちょうど床板が抜けるシーンの前後の場当たりをしていて、一步間違えれば怪我に繋がるシーンということもあり緊張感があった。役者の方もスタッフの方も集中していて、舞台監督や演出家の指示に即座に対応しているところがプロだなと感じた。

この日の演劇学校は、本科と研究科の両方見学させてもらった。研究科ではアップにも参加して実際に演劇学校の授業を体験させてもらった。見様見真似ではできない難しい練習法もあったが基本的にはうまくできているかはともかく私たちも参加できるものだった。アップが終わると研究科は二日前同様に中間発表に向けての稽古を開始した。しばらくその様子を見学させてもらってから本科の稽古場を見せてもらった。

本科も中間発表に向けての稽古が行われていたが、研究科と違いいくつかのグループに分かれそれぞれのグループで稽古を行っていた。グループ内で積極的に意見の出し合い・話し合い行われていて、生徒の意識の高さに感服した。

5. 四日目（10月7日）

四日目は紅組のゲネプロの見学から始まった。8日の本番は白組からなのにゲネが紅組からだったのは、白組のゲネ後に装置をそのままにしておく翌日装置の転換をせずに本番を向かえられて都合が良いからだった。私たちはゲネプロ開始五分前ほど前に会場に入れてもらい開演前のアナウンスから最後のカーテンコールまで見せていただいた。

ゲネ開始前には制作担当の方がいろんな位置の客席に座り、舞台の見え方をチェックしていた。舞台が見えずらかったり舞台袖が見えてしまったりしている席はチケットを販売できないのでその確認を行っていた。また、お客さまが座席に着くまでに使用すると思われる通路の予測・安全確認や、もし役者が登場退場を使う通路がある場合、その通路をお客さまが通らないように封鎖したり場内案内担当のスタッフに連絡したりしておくのも制作担当の仕事だそうだ。

紅組のゲネプロ見学後、白組のゲネプロまでの時間に田窪さんから日本の演劇業界についてお話を伺った。

もともと劇場は、小劇場演劇なら小劇場で、といったように芝居のジャンルによって劇場の種類も異なっていて、ジャンル間の垣根が高く関係性は希薄であった。しかし、小劇場演劇の「夢の遊民社」が南座で公演を行ったりとジャンルのボーダーレス化が進んでいる。これは各ジャンルで十分な力を持っていないことでジャンルという垣根を超える必要性が生まれているということととれる。

初日に館長さんから伺った話だが、演劇は現在東京のほうに集中しており、全国で行われている演劇の70%は東京23区に集まっている。そのため、すこしでも地域の文化を振興しようと

助成が国からなされてきたのだが、最近その助成の仕方に変化がみられる。以前まではある一つの事業に関して助成されていたのが、年単位などである一つの団体に対して行われるようになったのだ。

田窪さんのお話に軽く区切りがついたところで白組のゲネの開始時刻になった。白組のゲネも紅組のゲネ同様最初から最後まで見せていただいた。紅組の時もそうであったが、客席中央にビデオカメラが設置していて、営業用の写真や映像を撮影していた。

ゲネプロを見ると、前日に場当たりで見たシーンの前後を知ることができて、場当たりの時はよくわからないシーンだったものが頭の中で一つにつなげていくことができ、場当たりの時とはまた異なる心持で別のシーンのように感じた。

6. 五日目（10月8日）

インターン最終日であり「しんしゃく源氏物語」の初日でもあるこの日は、期間中唯一午前中からピッコロシアターで研修を受ける日だった。

まずは上演前の制作業務の手伝いで私たちは三人ずつの二グループに分かれ、チケットもぎりやチラシ配布と会場内の案内を任された。開場前のミーティングで予約で入っているお客さまの座る席と当日券で販売する席を確認した。客席の最後列は上演が始まってから入ってきたお客さまや劇場の職員が座るように完全に空き席にしていた。上演が始まると私を含む会場案内の三人は客席の最後列に入り白組の本番を観劇した。本番になると役者の方はゲネプロのときよりも生き生きしているように感じた。特に白組の本番のときは団体の観客がいて客入りがよかったこともあり、ゲネの時よりも演技が過激になっている所も見られた。上演後は客席の忘れ物やごみの回収を行った。

白組の本番が無事終わると、大ホールから資料室に移動して尾西さんより公立ホールのことについてお話していただいた。

日本には平成22年の時点で公設の劇場・音楽堂が約2,200以上存在していた。これらの大半の施設は戦後になって整備がすすめられ、高度経済成長という追い風を受けて数を増やしてきた。しかしこれらのホールの中には経営が困難になっているものも多く国からの助成が必要とされる。しかし、かといってすべての劇場に助成を行うことなど不可能なので「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」としてホールを重点支援劇場・音楽堂、中核劇場・音楽堂といったように序列化し、特に優れているとされる重点劇場に他の劇場を引っ張ってもらおうと考えたのだ。そのために重点劇場には国から助成がなされている。そして中核劇場やほかの劇場の職員は重点劇場で学ぶため、重点劇場に研修に行かなければならないことになっていた。ピッコロシアターは中堅劇場に指定されており、重点劇場である兵庫県立芸術文化センターに研修に行っている職員の方がいらっしゃり、今は代わりに職員さんが働いていた。

紅組の本番前は白組の時と同様の作業を手伝った。しかし白組本番前に会場案内をしていた三人がチケットもぎりを、チケットもぎりをしていた3人が会場案内を、と仕事を入れ替えて

臨んだ。上演が始まると、チケットの半券を種別や取扱事業所べつに分類し枚数を数え、観客の動員数を確認した。その確認作業が終わると、途中からだが紅組の本番も見学させていただいた。上演後アンケートの回収を行いアンケートの枚数確認を終えると、受付の机などを片付け、本番前後の制作業務は完了となり、この五日間の研修が終了した。

7. まとめ

今回は劇場制作の一員として研修するということであつたけれど、実際に制作の仕事を手伝うことはあまりできなかった。そのかわり劇場職員の尾西さんや劇団部の田窪さんから制作や劇場・劇団に関するお話を聞くことで公立劇場の現状や課題に関して知識を深めることができた。忙しい中隙間の時間を見つけては貴重な話をしてくださった方々に心より感謝している。

公立劇場が地域の文化振興を成功させるには公立劇場が自ら作品を生み出す能力を持つことや、ピッコロシアターの演劇学校や技術学校のように自ら作品を生むための能力・人材を育てる機関を設けることが求められる。そしてそれらを実現するためには公立劇場が長期にわたりある程度自由に運営・改革が行える資金とシステムが必要なのだ。文化支援活動というのは一定期間継続して行わないと効果がわからないことが多いので、文化振興のためには運営者や運営方針を頻繁に変えるのは避け、長いスパンで検討していくべきだと思った。

3 美術関係

3.0 大阪市立美術館でのインターンシップ

文学研究科教授 藤岡 穰

報告者が開講している東洋美術史演習「仏教美術の理論と実践」(通年・集中)は、主に日本・東洋美術史を専攻する院生を対象に、美術作品のフィールド調査などを不定期に実施し、調査研究の実践力を身につけることを目的としている。また、美術研究のうえでは大学などの研究機関と両輪をなす、博物館施設におけるインターンシップへの参加も奨励しているが、その受け皿として利用させていただいているのが大阪市立美術館のインターンシップである。2011年度には1人の院生が応募し、採用された。

大阪市立美術館のインターン(研修生)制度は、2008年度に創設されたもので、近畿一円の大学院で美術史を専攻する学生若干名のインターンを受け入れ、学芸員育成のための研修を行っておられる。以下に、その募集要項を抜粋する。

1) 募集趣旨

大阪市立美術館では、将来学芸員をはじめ美術館に関わる仕事に就くことを希望している方を対象に、人材の育成と当館の活動をより広く理解していただくことを目的として、インターン(研修生)を募集します。

2) 研修内容

常設展、特別展を中心に学芸業務全般に関して、当館学芸員と共に携わっていただきます。

3) 受入対象

大学院在学中もしくは修了者で、美術史や美術・文化に関連する分野を専攻する者、または同程度の能力・経験を有する者。

4) 受入人数

若干名

5) 研修場所 / 期間

大阪市立美術館ほか

平成23年(2011)5月中旬～平成24年(2012)3月31日 [10ヶ月程度]

6) 研修日 / 時間

原則として、1～2週に1日程度

9:30～17:00 [昼休み1時間程度]

7) 受入条件

- (1) インターンの報酬は無償とします。
- (2) 交通費/食費は支給しません。
- (3) 傷害保険に加入していただきます(費用は美術館で負担します)。
- (4) 当館とインターンの間で誓約書を交わしていただきます。

8) 応募方法等

エントリーシート

小論文 課題「大阪市立美術館インターンシップで学びたいこと」1200字程度

9) 選考

応募書類と面接により選考します。

10) 修了証

規定時間[150時間以上]、研修を修了した方に対し、修了証を交付します。

大阪市立美術館のインターンは、一人の学芸員のもとでその補助業務を担当することを原則とし、特別展や常設展、普及事業など、各学芸員がその年度に担当する仕事に共に携わる。ほぼ1年間にわたり継続的に行われる研修は、それゆえ責任も大きく、大学院生にとってもかなりの負担になる。しかし、それぞれの学芸員の方のご配慮（大変なご負担）により、単に補助的な業務に終始するのではなく、美術史研究のうでも有意義な、本当の意味での育成をしていただいております、とても貴重な経験の場となっている。この場を借りて、ご担当の学芸員の方々に感謝申し上げたい。

なお、2011年度に受け入れていただいた院生は、陶磁器分野の補助業務を担当し、無事に修了証も交付していただいた。但し、院生本人による活動報告については、その後、進路変更等の事情もあり、報告書から割愛させていただくことを御容赦いただきたい。